
まじっく

かいん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まじっく

【ΖΖコード】

Ζ2035Ζ

【作者名】

かいん

【あらすじ】

元ひっ這一の娘が謎の少年と出会つ物語。

何でもありな魔法世界と制約だらけの現実世界を行ったり来たりします。

元引きこもり主人公と一緒に電腦世界の創造主を探してください。

かつてあなたの作った世界が、当時の私のすべてでした。
それ以前の私は、まるで寝たきり老人のような生活。
コンビニに行くことすらまんならず、殆どの時間を自室で何もせず過ごす毎日。

友人はおらず、宅配業者と交わす会話すら声が震えた。
買い物は親任せ。完全な対人恐怖症。

そんな私が、あるときあなたの世界に触れたのです。
自らを鍛え、自分で稼ぎ、他人と協力して何かを為す作業。
そのすべてをあなたの世界から学びました。
その世界で私は、賢者、偉人とすら呼ばれるようになりました。
そんなとき、あなたの抱えている問題を知りました。
こんなに私を救ってくれたあなたを私が放つておけると思つ?
いえ、ごめんなさい。押し付けがましかつたですね。
素直になります。

おそらく私は、単にあなたの助けになりたかったのです。
こんなに私を勇気付けてくれたあなたの世界に、行動で感謝の意を示したかった。

え? いや、あの、その、つまり……
要するに私は、あなたに恋していたわけです。

街から程近い初級者向けの狩場。

広葉樹がうつそうと茂る森の中にできた小さな広場には、ところどころに切株が残る。そこにうず高く積まれた雑魚モンスターの屍骸の山。まだ知り合つて間もない私たち8人が仕留めた今日の成果だ。

バウンティーハンターのドヘルガンとベクティムは屍骸の山を指差し、まだ初心者である私たちに重いペナルティーを課してきた。「てめえ等が初心者だつてことは分かつて。この辺りを俺達の縄張りと知らなかつたんだろ？ 狩り散らかしたこと反省してるつてのか？」

ベクティムは十数メートルもある鞭を弄びながら舌なめずりをして続ける。

「だがな、初心者だからつて許されていい事とそうじやない事がある。この場合は後者だ。分るか？ ああ？」

私自身、ドヘルガンとベクティムの悪評は酒場で散々聞かされていた。のに、奴等の縄張りについては理解できていなかつた。未熟な私たちはいつの間にか奴等の狩場に踏み込み、その逆鱗に触れてしまつたのだ。

勿論、ゲーム内では何処で誰がどのように狩りをしようが自由だ。私たちは街から最も近いこの狩場で機嫌よく狩りを楽しんでいた。管理部からも何一つ文句の付かない模範的プレイヤー、のはずだつた。

ドヘルガンとベクティムが腹を立ててているのはあくまで身勝手自分勝手。狩りの独占というよりも、うがつた見方をすれば初心者に因縁をふつかけて少ない有り金を巻き上げようとしているように見

える。

今回の狩りに参加したのは私を含めて8名。そのすべてが初心者で、純粹に経験値や通貨ポイントを稼ぐのが目的だった。8名全員が貧弱な防具と武器装備。魔法も殆ど覚えていない。

ルピナ。

世界初のフリースタイルオンラインゲーム。その自由度の高さはそれまでのゲームの比ではなく、翻訳系アプリケーションに優れ、たちまち全世界に大量の熱狂的ファンを生み出した。

それまで引きこもりで友人も生きがいも無かつた私はたちまちルピナの世界に魅了され、一日の大部分をこのゲームに費やすようになった。最初は恐る恐るだつたゲーム進行にもすぐに慣れ、一緒に狩りをしてくれる者たちに声をかけることも出来るようになつた。現実社会では近所のコンビニで買い物することも恐怖なのに。

ゲーム世界で、私は当たり前のコンビニーションに触れ、失っていた何かを取り戻しつつあった。しかし、どんな社会にも悪辣な奴等はいるものである。

「いつもならな、金置いて行くだけで帰してやつてもよかつたんだが、あいにく今日は俺もベクティムも虫の居所が悪くてな」

もともと無事で帰すつもりなど無いな、と私は直感的に思った。ベクティムは得意の鞭をこれでもかと誇示し、その辺の木の枝や岩を破壊して見せた。

私たち8人は為すすべなく怯えるのみ。全財産投げ出そうが、丸裸になるうが、最早許されるすべは無いかに思われた。

ベクティムは怯えた子犬を見つめるような支配的な視線で、音速の破壊音を周囲に響かせ続けていた。奴が今欲しているのは金でも謝罪の言葉でも無い、いたぶり殺す快感だけなのだ。私は心の底で理解した。勝手に膝が笑い始めるのをなんとか抑えつけ、仲間と周囲の様子を伺う。

このゲームの大きな特徴の一つにタッチスキンインターフェイスの採用がある。

通常のヘッドセット以外に両手首の触覚センサー、これらすべてを合わせてマルチインターフェイスと呼ばれている。視聴覚インターフェイスが立体的な音声や画像を脳内に構築するのはもつすでに当然として、秀逸なのは触覚である。

人の病態の一つに連関痛というものがある。心臓に疾患があるとき肩こりなどと勘違いして原発疾患の発見が遅れたりする厄介なものだ。タッチスキンインターフェイスはこの皮膚感覚錯誤を逆利用。刺激の強弱と移動速度をコントロールすることでどんなに狭い範囲からでも、つまり両手首のセンサー設置面からだけでも、全身のあらゆる部位の触覚痛覚を殆ど再現できる。触覚痛覚においては約93%。同様の原理で嗅覚味覚もそれぞれ43%、56%がタッチスキンインターフェイスのみで再現可能となっている。

ベクティムの鞭がひとりわ大きく唸り、私の右隣のシーフが大きく後方へ吹っ飛んだ。瞬間、生暖かい血飛沫が私の右顔面を濡らす。私は震えを抑え、自分が今置かれている状況を脳味噌の一部でなんとか冷静に判断しようと努力した。ベクティムを刺激しないよう細心の注意を払って身構える。

何とか隙を見てやられたシーフを視線の端に捉えると、特大スプレーで抉り取つたような喰いさしの頭蓋がそこにある。抉られた頭蓋くぼみの中央に高さ10センチほどの鮮血の噴水。途端に私は見てしまつたこと自体を後悔し、自ら的好奇心を恨んだ。喉の奥から酸っぱい物がこみ上げてくる。

タッチスキンインターフェイスの欠点はその長所と表裏一体。苦痛に伴う恐怖まであまりに忠実に表現されてしまうため、死に行く者にとつてそれは既にヴァーチャルを超えている。耐性の無いものが高感度センサーを身に付けると受けた苦痛がトラウマとなつて残つたり、時には死亡してしまうこともある。よつて日本国内で市販されているマルチインターフェイスは厚労省によってリミッターが

かけられている。しかし、このリミッターをそのままにしてゲームを続けている上級者は殆どいない。センサーの反応速度と反映性は魔法や武器の使用精度に直結するため、皆独自にリミッターを外し、もしくは感度を上げ、またはそういうた改造が為された外国製品を自ら並行輸入し、ゲーム内で使用している。感度向上によつてレベルアップは格段に加速されるが、その分被害を受けたときのショックはプレイヤーを直撃し、心臓や精神に負担をかける。

「ミニカ、左後方に小路がある。合図したら一緒に走るぞ」

やられたシーフとは反対側、私の左隣にいた斧使いが小声で私の名を呼び、逃走を誘う。周囲はうつそうと茂る広葉樹林。左後方には斧使いがたつた今指示した小路が行く先不明のジエットコースターのように口を開けて待つてゐる。

引きこもりだつた私がこのゲームを始めてまだ一ヶ月。現実社会で手に入れられなかつたものを私はこの世界で沢山手に入れた。知識、社会性、お金、そして友情もその一つ。すべてが初めての体験。あまりの嬉しさに私の感動は行き場を失い、ゲームの開発者にラブコールのファンメールを送つたりもした。しかし、得られるものの総量に比例して凄まじいまでの心的負担をプレイヤーに求めるのもこのゲームの特徴だ。私たち8人が、今はもう7人だが、陥つてゐるこの状況がまさにそれである。

「今だ！」

叫ぶ斧使い。この声に十分速く反応できなかつたことが幸いし、私は生き残つた。

駆け出す斧使いの体を後方から這い上がるベクティムの鞭が上中下に3分割する。まだ3歩しか走つていない斧使いの体が鞭と駆け出す勢いの相乗効果で前方空中へふわりと投げ出される。明らかに斧使いの読み違い。舞う斧使いの首と胴。息絶えた彼の目に浮かぶ意外そうな表情。見る間に血の気が引いていく。噴出す血液は肉片の落ちた場所よりさらに数歩分前方へ撒かれ飛ぶ。駆け出そうとした私は一拍遅れて斧使いの惨状を目撃し、膝の力が抜けてそのまま

まその場にへたり込んだ。

腰が抜けた私の頭上を水平に泳ぐベクトaimの鞭。 そのときまだ立っていた者達が一斉になぎ払われる。 肉片と血の乱舞。 すぐそこに見えている小路が、 海上の不知火か砂漠の蜃氣楼のように儚く朧に揺らぐ。

今日ここで死んだ奴等は改造インターフェイスを着けていたのだろうか？ だとしたら相当に危ない。 奴等の精神と体力が頑健で、 ヴァーチャル死の負荷に耐え、 無事復活できることを祈るしかない。 気が付くと生き残っているのは女性一人のみ。 私と私の横にいる未熟な魔女だけとなっていた。

付いた血液を一振りで払つて鞭を巻き取るベクトaim。 ドヘルガンに至つては最初から得意の片手剣を取り出してすらいなかつた。 「おつと、 動くなよ。 俺達は賞金稼ぎだ。 他人の縄張り荒らした罪人が賞金首になる前に処刑したつてだけの話だ。 なあ、 分るだろ？ そういう意味じゃあ恨みっこ無しつてこつた。 ククク、 それに何も殺すのだけが目的じやねえんだしよ」

「ゆ、 許してくれるの？」

未熟な魔女が叫んだ。 怯えきつた目に震える体。 通常のインターフェイスでもトラウマが残つてしまいそうな纖細なキャラ。 「だからお前等2人だけは殺さずに残してやつたんだろうが。 俺達の慈悲に感謝しな」

一瞬、 希望に輝く未熟な魔女の瞳。 が、 それをあざ笑うかのよう にドヘルガンの含み笑いが周囲に広がる。

「くつくつく…… いい加減にしてやれベクトaim。 これから起これに何の予定変更も無いんだ。 お嬢さん2人に余計な望みを持たせるんじやねえ」

ドヘルガンの一言が私たち2人の希望をあつけなく打ち砕く。

「余計なこと言つてるのはてめえだろドヘルガン。 持ち上げてから落とす。 このロマンが分んねえのかね？ フン、 まあいい……」

それを聞いた未熟な魔女と私は安堵の表情のまま凍りつく。

「お前等2人とも武装解除してその場で素っ裸になりな」

ベクティムは素に戻り、私たち2人に無慈悲な要求を突きつける。すでに鞭を仕舞つたからといって、今の私たちでは2人がかりでもベクティムを倒すことは出来ないだろう。さらにその後ろにはドヘルガンが控えている。

「さつさとしねえと両手足切り落として言ひことを聞かすことになるぞ、ああん？」

未熟な魔女は、私の方を伺う余裕も無いほどに追い込まれている。私たち2人はこのままこの獣どもに弄ばれて終わりなのか？　さらに身包み剥がれて遂には殺されるのか？　他の6人の仲間のように……

……

私は懐の煙玉を探つた。今日はまだ一発も使つていない。まだたっぷりとストックがある。こいつを使って逃げ延びることが出来るだろうか？

とんでもないクズ野郎だがベクティムの鞭の腕は本物だ。煙で目くらまししたからといって、あの十数メートルの射程域から逃れられるのか？　逃げおおせるには何かとてつもない幸運が重ならなければ無理だ。

「動くなよ。じつとしてりやあ痛くはねえんだからよ……」

ベクティムのどろりと濁つた目が私たち2人を舐めまわしながら、一步、また一步と近づいてくる。

差し出された薄汚い手。凍り付いて焼け焦げて、蛆に喰われて腐れ落ちろ！！　私は心の中でありつたけの呪いを浴びせかけた。魔法ですらない呪いの言葉にはもちろん何の効力も無い。私は今度は自分自身の低レベルと無力をも呪つた。

「うががががああああつ……　うぎ、ぎぎぎ、ぐぐ……」

突然叫びだすベクティム。撫然とするドヘルガン。

「うがくそうつ、お前等何しやがつた、く、く痛、つつつ……」

ベクティムの腕を侵しているのは大魔法『マニテュオバクール（魔の過冷却）』の冷氣だ。未熟な私が見るのは今回でまだやつと2

度目。この大魔法を唱えられるものがここには誰も居ない、にも関わらず、魔法は突如降つてわいたようにベクトルの腕を侵し始めた。

私はこの好機を逃さず、煙玉を一つ炸裂させると未熟な魔女の前腕を引っつかんで先程の小路の方へ駆け出していた。

5歩： 10歩： まだ鞭の唸りは聞こえない。

私は続けて2個3個と煙玉を炸裂させつつ、前傾姿勢で駆け足を早める。今掴んでいる腕にちゃんと魔女の全身がくつついで来ている事を祈りながら。さらに4個5個と後方にばら撒く。

血溜まりを飛び越え、林を抜けて草原に出る。後方を振り返るのが怖い。スピードは落とさず、未熟な魔女の体勢を整えつつ2人でさらに走る走る。

先程居た森が遙か彼方に見える。小高い丘の上に達したとき、私たち2人は草むらに突っ伏して倒れた。息切れが收まらない。

逃げ出す過程で私は、仲間と協力することの大しさと互いに足手まといになるリスクについて嫌というほど思い知った。おそらく隣で息切れしている魔女も同じだろう。協力するときはし、必要なならば個別に動く。命を失わずにこの大事な教訓に気付けてよかつた。マルチインターフェイスは草原で仰向けに転がる私に風のそよぎと生き残った感動を伝えてくれている。

ドヘルガンとベクトルの賞金稼ぎ2人はもう追つて来ない。殺された仲間達のうち何人が高密度インターフェイスを使っていたのだろうか。彼等に後遺症などが残らないことを祈るしかない。

ベクトルの腕を止めたのは一体誰だろう。それともあれは魔法ではなく、ベクトル自身の持つ病だったのだろうか？

いやしかし、肉体が内側から凍りつく病など考えられない。答えの出ない問題を棚上げし、私は空を見上げた。

隣では未熟な魔女が死んだように眠っている。そういう私も魔女であり魔法使いなのだが、まだまだ職業を名乗れるようなものではないと今日の一件で思い知つてしまつた。

それから数年の月日が流れた。

アロウの街から数十キロ。

タスクを達成するために訪れた密林の奥地で私は予定外の地下空間に迷い込んだ。

タスク自体は軽いものだつた。私のレベルなら難なくこなせる程度の。

それにしてもどこだここは？

完璧なはずの私のマップにもいまだ載っていないダンジョンか、それとも次元のひずみか。

大剣ワルギスを振り回せばゴブリンやオークをひと薙ぎ。唱える呪文は最上級ばかりで並み居る魔法使い達も皆揃つて恐れおののく。この世界での私を一言でいうなら『無敵』。

これでほほ間違いない。

その私が自分のいる場所すら把握できないといつのはいつたいどういうことなんだ？

つい先ほどもらつたタスクを軽くこなし、帰ろうと振り向いたら急に足元が崩れた。気がついたら真っ暗闇で、どうやら目の前には人が倒れているらしい。先ほどからピクリとも動かないし、他に気配を感じることも無い。暗闇でかつ静寂だ。とりあえず魔法で周囲を照らすことにする。

「ルミナスッ！」

明かりの呪文によつて周囲は一瞬でまばゆい光に包まれた。

少し光が安定してくると、マントに包まれた魔法使いとも僧侶ともつかぬ男が一人、すぐ目の前に横たわっているのが見えた。周囲

は思ったより広い。ただの地下空洞というわけでもないらしい。

壁には一定のパターンで模様が見えるが、人為的なものかどうか判別がつきがたいほど表面が荒れている。ただの地層なのかも知らない。それにしては綺麗に空洞が開いたものだ。ちょうど人の身長プラスアルファくらいの高さで縦横もほぼ長方形。人為的なもので無いとしたら驚くべき自然の悪戯だな。

「おい、起きろ」

私はつま先で倒れている男を突いてみた。この世界ではこういう罠がよくある。

いつでも反撃できる態勢を取りつつ男を起こそうとしてみる。

3回ほどつつくと男は呻いて身を起こした。

見た目は20歳前後。年齢にそぐわぬ高価そうな宝飾に年季の入った魔法道具。その上から埃にまみれた黄緑色のシルクのマントというちぐはぐなスタイル。

私は男の格好をあらためて見て思わず吹き出した。何者か知らないうが、悪辣な連中の一味では無さそうだ。

「それなんて格好？ そのマント、ひょっとして元はパーティ用？」

「ん、うう、オリジナル……かな。ああよかつた、生きてる……」

「私はミニ力。この世界で最高ランクを極めた何でも屋の大魔法使いよ。あなたは？」

「僕はトニー。なんて言えばいいのかな、ええと、修行中の魔導士だ」

トニーは埃を払いながら立ち上がった。なんと彼の背は私より3インチ以上も高い。女魔法使いの中ではかなり大柄な私が、立ち上がった彼を完全に下から見上げる形になつた。

「良かつた。間に合つたか」

トニーは溜息をつくように言った。

その後、頭上で凄まじい爆音が響き渡った。

壁の表面は崩れ、砂埃が舞う。私たち2人はその場でよろめいた。

「どうしたこと?」「これ……きやあ……」

トニーは、戸惑いようめく私の両肩を支えるようにしつかりと抱いた。まるでこの爆音を予想していたかのようだ。

「私がつこうつきタスクをこなしたときには何の前触れも無かつたわ。あなた何か知ってるの? この世界は……」

私はトニーに事情を聞こうとしたが、ますます大きくなる地鳴りと轟音の中、声がなかなか通らない。自分が把握していないダンジョン内で、素性のよく分らない相手に必死で状況説明を求める偉大なる魔法使い。それだけでもう十分滑稽だ。だが分らないものは仕方が無い。

私は揺れる地面に両足を内股に踏ん張り、トニーの胸に顔を埋めて少々ヒステリックに情けない問いかけを繰り返した。

「バカ、もう、ホントに怖いんだから! 早く説明しなさいよ。わわ、キヤー!」

彼はそんな私の背中に手を回し、抱き寄せたまま後ろ頭をかきあげるようにそっと撫でる。

「もうそろそろ終わると思つよ。危ないとこりだつたね」

彼の声はあくまで落ち着いていて、優しい。

私は彼の胸に埋めて顔色が見えないのをいいことに、大いに赤面した。最強の魔法使いなのにあんな軽い悲鳴を上げちゃつた。バカバカ私のバカ。大魔法使いの威厳が台無しだよ。もうやだ。やだやだ。

まもなく爆音は聞こえなくなり、地鳴りや轟音も静まった。

私が最初にかけた明かり魔法はまだ薄つすらと周囲を照らしている。

トニーは私を抱きしめたまま細面色白の顔をじちりに向けて軽く微笑んだ。包み込むような笑顔だ。

「バ、バババ、バカね。ちょっと足場が悪かったから掴まつただけ

……

私は押し退けるように彼から離れた。なんだこのシンデレキヤラ、

私もしくねえ。明らかに最高位魔法使いの貫禄にそぐわない。これまで積み上げてきたものがあ……

「トニー、お願いがあるんだけど。さつきの悲鳴、聞かなかつたことにしてくれない?」

私は上目がちに懇願する。もつ貫禄なんて何処へやう。

「いいよ」

トニーは子犬をあやすような笑顔で答える。

それにしてもこの男、あれほどの大爆発でも落ち着きはらつたこの態度。この私ですらこんな大異変これまでに遭遇したこと無いのに。

地上に出ると背筋がうすら寒くなるような焼け野原が辺り一面に広がっていた。これじゃあ無敵の魔法使いでもひとたまりも無い。もしあの時この場にいたら間違いなく即死だ。

変なファッショニの優男は、期せずして私の命の大恩人となつた。「見たことも無い殲滅型の魔法ね。どちらかと云うと天災に近いわ。個人やグループで生み出せるマジックパワーとは桁が5~6個違う規模。トニー、どういうものなのか説明できる?」

「ああ……ん、知らないよ良くなは」

トニーは私と目を合わさずに答えた。

「ただ、とある筋から今夜大規模なPK^{プレイヤーキリング}がこのあたりで行われるって知つたんだ。でも僕最近この世界に来たばかりでさ、勝手がよく分らなくて。しかも、時間も無くてかなり焦つててね。そんなわけで格好もこんなで……」

トニーは取りとめの無い返答をした。

「それよりも助かって良かつたじやん。ね、ミニカ、街に連れて行つてくれるかい? 今はアロウの街のトリッショの酒場がメインのタスク配布ポイントになつてるんだろ?」

「来たばかりなのに詳しいのね。予習でもしてきたの?」

私は、アロウ周辺では傍若無人冷徹残酷な魔法使いで通つてゐる。

その風評を気にしたことは無いし、誇りにすら思つてきた。でも、このトニーにだけはそんなあるがままの私を知られることに少し抵抗を感じる。初めてだ、こんなことで胸がドキドキするなんて。

「わ、私は一匹狼の魔法使いだから紹介できるような仲間なんか殆どいなけれどね。まあいや、疲れたしもう戻りうと思つてたところ。一緒に行く?」

「うん、頼む」「ああ、それと……」「え?」

「さつきは命拾い、ありがとうございました」

落ち着いた私は少しおどけた調子で御礼を述べた。

周囲は夕闇に包まれ足元もおぼつかないが、凄まじい魔法力で焼き扱われた周囲にウエアウルフ一体スライム一匹いなことは明らかだつた。

普段なら警戒しながら慎重に進むべき夜の道を私たち2人は時は冗談を言いつつ話しながらのんびり帰つた。

まもなく私達はアロウの街の大きな外門にたどり着いた。外門には荒野から来る人外が近づけないようにならうに多種多様なまじないがびつしりと巻きついている。ざつと30種くらいはあらうか。このうちの5~6個はギルドからの依頼で私自身が受けたものだ。痛んではいるが、まだきちんと機能している。

外門から少し歩くと小さな内門があり、そこから程近いところにギルドの集会所にもなつてているトリッシュの酒場がある。

扉を開けると酒と煙草と硝煙の臭いがスモークでも焚いたかようにな溢れかえってきた。

「ミニカ、おめえ無事だつたんだな。心配したぜ」

野太い声が店の奥から響き渡る。酒場のマスターで情報屋でもあるガウが髭面を搔きながら声をかけてくれた。

ガウは巨人族とも見まごうばかりの大男。

一匹狼の私だが、このガウにだけは少し心を許している。一見粗

雑に見えるが実は細かなところに気がつく人の良いオヤジだ。

「ああ、危なかつたがね。このトニーがいなけりや灰も残っちゃいなかつたかもな」

私は厳しく声のトーンを落として、横にいるトニーの肩をポンと叩いた。

「ずいぶん大柄だが職種はなんだ？ よけりやあうちのギルドに入んねえか？」

私への心配は一瞬で終わり、いきなりトニーの勧誘を始めやがつた。ちやつかりしたオヤジだ。ガウは私のことをトニーにどういう風に話すつもりだろう。別にどうでもいいんだが、なぜか気になつて仕方が無い。

「ガウ、か……」

トニーの目からは先ほどまでの微笑が消え、心中探るような鋭い視線がガウに浴びせられた。

「はあ？ なんだお前さん。俺とは初対面じゃなかつたか？」

ガウはトニーの変化に少し戸惑つているようだ。

「いや、何でも……」

トニーはガウから目を逸らし、下唇を噛むような仕草をする。彼はそれきり言葉を切り、值踏みするような視線で店内を見回し始めた。ギルドに登録したりタスクを貰つたりする様子も無い。

「おいミニカ、ちょっと来い」

ガウが私の手を掴んでカウンターの奥に引っ張り込んだ。

「いててて、呼べば行くよ。引っ張るなよ」

いくら女魔法使いの中では大柄でも、私の腕はガウの数分の1ほどの太さしかない。いつも思うがこのオヤジ、ギガントの血でも入つてるんじゃないのか？

「俺は見覚えねえぞこの兄ちゃん。いつてえ何者だ？」

「知らないよ。私も今日初めて会つたんだ。おかげで命拾いしたんだが」

「おうよ。心配してたんだ。超ど級の爆発だった。オレがお前に渡したタスクとちょうど同じ方角同じ頃合いだったしな。お前が店のドアを開けて顔見せるまでは、ずっと冷や冷やしてたんだぜ。んでクリアはしたのか？」

「タスク自体は楽勝だつたよ。つか私のレベルでクリアできないタスクにもう長いことあたつてない。それにしてもあの爆発は凄過ぎだ。トニーのいた地下空間がシェルターの役割を果たして命拾いしたが……地上にはもう何にも無くなつて、そりや綺麗なもんだつたよ」

私は疲れた顔で微笑んだ。

ガウは少し私に調子を合わせたが、すぐ真顔になり、トニーの話に戻つた。

「あいつちょっとおかしくねえか？ ノンプレーヤーキャラじゃねーよな？」

「まさか。普通に会話してたんだよ」

「ならいいが。最近は色んなパターンがあるからな」「ミニカ、ガウ……ちょっとといいかい？」

いつの間にかトニーがこちらに向いて声をかけている。

「用事が出来たんで今日はもう落ちるよ。今度いつまた来れるか分らないけど、寄せたらここにも寄るね」

そういう間にもトニーの影が薄くなつてきた。

「ああいいよ。いつでも来な」

ガウは事務的にトニーを見送つた。

「待つてトニー、私は……」

急いで声をかけたがトニーの体はもう向ひの側が透けて見えている。声も途切れ途切れにしか聞こえない。

「また……ニカ。また今度ゆつ……話……う。僕……」

トニーはフュードアウトした。

リアルタイムはもう午前3時を回つてゐる。周囲を見回すと酒場からは急速に人影が減つていた。

「まあまたこいやミニ一か。次回以降はタスクも重めだ。時間かかるぞ。集中して来られるのはいつごろだ？」

「気付けばガウも少し眠そうだ。

「来週再来週は休みも多いし、主な用事は午前中に集中させるから。大体いつでも」

「分った。俺ももう落ちる。キッドに代わるぞ」

そう言うとガウの影が薄くなり、代わりに緑色の衣装をまとったかわいい子供の画像が現れた。

キッドは自動でタスクの割り当て、経験値管理、クリアタスク管理、アイテム保管、イベント運営などを行ってくれる総合窓口。ガウが酒場の情報屋としてカウンターに立てないときに代わりを務めてくれるノンプレーヤーキャラだ。

「最近はそのまま寝こけること多かつたからな。今日はちゃんと帰ろう」

私は独り言を言いつつ人影まばらになつた店内に別れを告げた。数時間前にあつた爆発はもう遙か昔の出来事のように淡い意識に包まれつつあつた。

早朝参加の連中がポツリポツリと店内に姿を現す。粗野な声が店内に飛び交い、キッドがそつなく彼等にタスクを配つてゆく。

世界は回り続けていた。

けたたましく響くベルで明け方の夢は悪夢に変わる。

ガンガンと割れそうな頭をかかえ、止めた目覚ましの文字盤を覗き込んだ。

「げ、今止めたんじゃないの？」この目覚まし、何で30分以上もタイムラグがあるのよ？」

7時半に仕掛けたはずの目覚ましはもう既に8時を回っている。止めた状態で意識を失い、その姿勢のまま30分の時が流れただった。

いや、もう何度目だこの現象！

明け方4時にログアウト。そこからウイルスチェックとデフラグを初めていつの間にか意識を失つた。ベッドに潜り込んだときの記憶は綺麗さっぱり消失している。

最終的に寝たのは何時だ？ 自問自答しながら歯磨きと洗顔と朝食と着替えを同時にこなす離れ業。このトーストなんか味がスースーするよ。

「あ、パソコン落としていかなきや……」

つい先月、勝手にファイル交換ソフトをインストールしてばら撒くというとんでもないウイルスに見舞われて、パソコンがぶつ壊れたところなんだ。

まあクレジットカードはなんとか無事だつたし、ただの愉快犯だったみたいだけど、安月給でそつそつ突発的な出費があつては生命の危機。

それにしてもウイルススター役に立たねえ、訴えるよつ！
テレビを点けるとこれまたハッカーの報道。

困った奴等だけど人が死ぬわけでもないし、ゲームのチート探したりするのにも一役買つてる人たちだから、徹底的に恨む気にもなれない。

頼むからほびほびにやつてくれ。

私の名前は、浅倉あさくら小姐みにわ。

変な名前だろ？

親が遊びで付けたとしか思えん。70歳になつても80歳になつても小娘ミニガだぜ？ ふり仮名ないと誰も読めないし。

読み辛い名づけするのが流行つたのかな？

ただいま18歳で今月から一人暮らし。

身長低し。顔は美人……じゃないけど不美人でもないと思いたい。だれかそういうくれ。念のためたのむ。

正直、中学までの私は最悪だつた。病弱でチビ。友達いない、話下手、根暗の五重苦。

その所為で中学高校の半分は引きこもり。なんとか卒業できたのが不思議なくらいなんだ。実は今でも人前じゃあダメダメ。あがつて声が震えちゃう。

しかしあそのおかげと言つちゃあなんだが、ネットキャラのレベルは上がりまくり。

余計なお金は一銭も使わず、一からその世界最強レベルまで引き上げたのは実は私一人くらいしかいないんじやないかな？

おかげで大量にタスクをこなして、ゲーム内では大金持。

あと、ホントはやつちゃいけなかつたんだけど、リアルマネートレードつて知つてる？

ゲーム内のアイテムや召喚獣を現実のお金で売り買いするの。

なんせその世界最強レベルだから最後の方は面白いようにレアアイテムが手に入つてさ。

ここだけの話、1年で150万円くらい儲けたんだわ。

だつて元はタダだよ。たしかに死ぬほど時間を費やしてはいるけ

ど。

引き受けるタスクは後になるほど難易度上がるから、殆ど私のキャララじやなきやクリアできないようなのばっかだつたな。

そこで、貯めたお金でさ、一念発起したわけ。このままじや駄目でしょ、一人暮らしでしょやつぱ、つて。親はびっくりしてたけど、貯めたお金のことは言わないで、ちょっとぴりだけ援助してもらつて、ワンルームマンションに引っ越したわけ。

自分でもびっくりだよ。

でも、たとえネットゲでも、引きこもりの高校生が一人で150万も貯めたのはなんか自信に繋がつたんだと思う。

だから一人でもやつていけるつて、なんとか踏み出せたんだ。

これから目標は、ゲーム内で得た自信を足がかりにリアルでも自信を持つこと。最初にこのゲームを作つてくれた人には今でもホント感謝している。

リアルの私の仕事は派遣社員。

ソフトウェア開発している社員の依頼でコピーを取つたり資料を整理したりする人にお茶を入れたりする仕事。

え？ 良く分らない？

要するに雑用係のそのまた下つてこと。

月給は10万ちょい。

だから今でも夜間は大魔法使いとして稼ぎまくらなきやいけないし、そのせいで毎朝目覚ましの前で行き倒れの旅人みたいな姿勢になつてるわけ。

派遣の仕事はまだやり始めたばかりだし、今からリアルでもレベル上げしなきや。

「おはよひざります」

突然背後から元気の良い声。

「お、おはよう……」

リアル社会での私の声はなんて小さくて元気が無いんだ。

ゆっくり振り返ると後輩の椎野君が立っていた。

後輩といつても、私は3月下旬採用、彼は4月上旬採用で10日余りしか違わないんだけどね。でも先に入つて一通り仕事の手順を教わっていた私はそのまま彼の教育係になつたのでした。なんせ仕事は簡単。数十人いる社員さんのそのまたアシスタンツさんのその下で細々と雑用を聞いてればいいんだから。こんなので先輩気分を味わえるなんてちょっとお得。引きこもりのおちこぼれがなんとか偉くなつたもんだわ、ふつふつふ。

椎野君はチビの私なんかより遙かに背が高く、スラリとした細面で頭がちっちゃい。私にとつて彼はトテーモ氣になる存在。でも私自身、まだ自分の思いには自信が無い。

中高の大部分を引きこもりとして過ごした私は、長い間恋人どころか普段会話を交わす異性さえもいなかつた。当時の私は極度の対人恐怖症。

宅配業者や近所のご老人と話すのでさえドキドキして声が震えた。当時より幾分マシになつたとはいえ、今でも他人と話すとき私の心臓はしばしば駆け足になる。悔しいけどその所為で、私は私のドキドキが恋愛感情によるものなのかそうでないのか分からぬ。私だけて女の子なんだ。人並みに恋愛感情だつてあるんだ、つて信じたい。

「あのお、椎野さん。午前中はA列B列のならびに付いてもらつていいですか？」

あ～、指示するだけなのに声が震えるう。そういえば同年代の男の子と直接話したのは中学校のグループワーク以来のようなん……

「はい。分りました。A・Bですね」

良く通る椎野君の声。圧倒されぢやう。

仕事に入つてしまえば、あとは担当先の指示に従つてただ黙々と雑用をこなすのみ。

昼は気弱な派遣社員。夜は天地を搖るがす大魔法使い。あく、早く帰りたい。

「君新しい子? 」「ううう記事わかる?」

休憩中の社員さんから突然話しかけられた。最初は誰に声をかけてるのかよく分らなかつたが、新しい子つて私と椎野君しかいないし。

「はい? いえ、あの良くは……」

なうんて返事するだけで声が震えるんだ。まつたくもう私の意気地なし。

記事は今朝テレビで見たハッカーのものだった。

「俺達の仕事つてどんなかわかる? あんま詳しくは言えないんだけどや」

上手く返事できないが、社員さんの聞きたいことはなんとなく分つた。

「俺達の仕事つてこいつらと戦うことなんだよね。もしくは有効な予防線を張ること」

「おお! ひょつとして私今すこいことを教えてもらおうとしてるんじやないかしら。

「宇賀さん達のお仕事が、ハッカーと戦うこと、ですか?」

私は慌てて田の前の男性のネームプレートをチラ見し、会話に生かした。

宇賀さんは少しやせ型でメガネにボサボサ頭の、30歳前後の男性。見た感じ典型的なシステムエンジニアだ。

「あ、ああ……」

男性は自分のネームプレートを見て納得し、苦笑いした。

「ええと君は、浅倉さんか。そうだよ。俺達は全世界の天才たちと戦つてるのさ」

「天才って、ハッカー?」

「俺達のチームは総勢50人、君たちも入れてね。一般的で汎用性

が高い、改変が容易で、解除されにくいつプロテクトを開発しているのさ」

「物凄く重くなりそうですね」

素人の私が聞いても難題に聞こえる。

「俺達の仕事は理論図とフローチャートを作つてテストプログラムを走らせること。残りは解除手法を開発するチーム。いたちごっこをチームの中でやつてるわけだ」

「どのくらいで出来るんですか？」

「いま、有効だと思える方法が15種ほど挙がっている。いまから一ヶ月で50種まで増やし、それをまた25種ほどにまで絞り込む。そのうちの3~5種を組み合わせ一つのプログラムに組み込む。組み込み方はランダムだし、ダミーも混ぜる」

「それでもうハッカーを防げるんですか？」

「いや、無理だろうね。時間は稼げるかもしれないが

「破られたらどうするんですか？」

「また作るよ。人間が作るものだからね、絶対は無い。相手はプログラムジャンキーみたいな連中だし、俺達が作ったデータを遡つて解析してくるよ」

「大変なお仕事なんですね」

めつたに聞けない仕事の内側を教えて貰い、私は興奮した。

「時間稼ぎだね。これで仕事になつてお金もらえるわけだし。絶対完璧なプロテクトなんかが開発されたら逆に俺達が干されちゃうよ」宇賀さんは軽く笑つてコーヒーカップを置き、手を上げて自分の席に戻つていつた。

「あ、そうそう」

席に着く手前で宇賀さんは私の方に向いて思い出したようにいつた。

「ある有名なネットゲーム上で妙なアクシデントがあつたんだ。友人に開発者がいるんで問い合わせてみたんだけど良く分らないって言つんだよね。天変地異か核爆発みたいな現象なんだけど、そんな

イベントの設定は無いって言つんだ

「天変地異か核爆発、……？」

私はドキッとした。

「もちろんゲーム内での話だよ。俺はそのときまたまログインしてたんだけど。みんなが集まる酒場で、そのときはじめて見かけたキヤラの名前が……」

心臓が口から飛び出しきそうだ。

「トニーって言つらいいんだけど

え……？

「それ、いま売り出し中のハッカーと同じ名前なんだよね」マジですか？ 心臓を咥えたまま背筋に氷を当てられた、そんな気持ち。

「まあ、でもありがちな名前だし、関係あるかどうかは分んないけどね」

「そ、そりですよね。カタカナ3文字なんて、被りまくりでしょう」

「そう思つてアクセスログを確認してもらつたんだよ。ほら俺、開発者で管理アクセス権のある友人いるから」

またまた背筋に冷たいものが……

「あの事件の時点でのログインしてたのが16万人弱。そのうちトニー一名でログインしてたのは8名。そのときの足跡リストで前後1時間以内に酒場にいたトニーは……」

言われる前からもう答えが分つたような気がした。

「ゼロだった」

「酒場にいたトニーは0人だったんですか？」

「その通り。まあでもあのゲームはニックネーム登録も出来るし、ニックネームいつでも変更可能だから。富田さんとかそういう名で登録してて、ニックネーム表示がトニーだつただけかも知れないけどね」

「あ、そう、そうですよね。毎回ニックネーム変える人とかもたま

にいるみたいだし、ややこしいったらありやしない」

「そう言いながらも冷や汗が止まらない私。もうやめて～あるの？ まあとにかくハッカーのトニーと同一人物かどうかは分らぬけど、ニックネームよく変える奴はPKの可能性が高かつたりするし、もしやつてゐるなら近づかない方がいいかもな」

やつてるもなにもこのゲームに関しちゃプロ級、最上級魔法使いだよ～ 年収150万で本業より儲けてるよ～ その辺のPKなんかチョチョイのちょいでボッコボコだよ～（笑）しかし、なんか引かれそうで素直にカミングアウトできないのが辛い。もと引きこもりの悲しい性か……

「ところで変わった名前だけど、浅倉さんって下はなんて読むの？」

「あ、ハイ、あの、ミニカです。浅倉小娘あさくらみにが……」

「へ～、じゃあ今度からスカートはミニはいてきてよ」
宇賀さんは少し考え込む素振りを見せた後、ニヤニヤしながらそう言つて自分の席に戻つていった。

まだ若いくせに典型的オヤジのノリ。そんなんじゃあもてないよ。それにしても、あ～疲れた。

まさか会社でネトゲの話が出るとは。しかも昨日の今日じゃん。あの超有名ネットゲームの管理アクセス権持つてる友人が身近にいるなんて、さすが業界人は違うなあ。

ふと時計を見るともう終業時間近くになつていた。

椎野君もそろそろ後片付けに入つてゐる。

さつきまで無駄話ばっかりしてた私。そんなふうにさぼつてばかりいる先輩の背中をマジマジと見られてたんじやないだろ？ う～、早くも先輩の威厳喪失？

「浅倉さん、もうあがるよね？ タイムカード押しとこつか？」

「え？ ああ、ありがと」

「ん～、たぶん大丈夫。なんか彼十分優しい。」

会話の中身は聞こえてなかつた？ 上手く今風の若者に見えたのかしら？

でも実際話すと声震えちゃうんだよなー うーんちくしょー
さつきまで心臓が出たり入つたりしてた所為か今日はなんかいつもよりハイテンション。この調子で夜の部もバリバリ稼ぎまくりますか。

タイムカードのお礼を言つて帰りつゝするとなぜか後ろから追いかけてくる足音。

おいまさか、社員さんじやないよな。社員さんは定時帰宅なんか一人もいんないんだからこの会社。それどころかマイパソコンと寝具一式持ち込んで寝泊りしてるよつた人もいるくらい。噂、じやあ殆ど帰らないんで自宅のアパート引き払つちゃつたとか引き払つてないとか、もう都市伝説レベル。……てことは、おい、まさか。

「浅倉さん、一緒に帰つていい？」

椎野君だあ、嬉しいはずなのになぜか嬉しくないこのお誘い。人前赤面恐怖症な私。

同じ会社で同期で、帰る時間も同じならそつや声くらいかけるわな。しかし元ヒキコモリのこの地味娘に同年代とのまともな会話が出来るのでしようか……

ああ私つたらなんてネガティブな……まだおじさんとの方がマシだあ。

恥ずかしいよ。何話せばいいの？

「さつき宇賀さんと話してたのちよつと聞いちゃつたんだ。浅倉さんでネットゲームやるんだね」

キター！

「う、うん、ちよつとね」

「へー、見かけによらないなあ。もつと読書とか音楽鑑賞なんかが趣味なのかなと思ってた。実は僕もやるんだよネトゲ。浅倉さんは何に嵌つてるの？」

キタキタキタキター ここではぐらかすのはあまりに不自然。

「んー、こりいろやるけど。一番は『リーマス』かな……」
言つちやつたー

「あー、あれ、今一番熱い奴だよね。僕もやつてゐる。実はつい最近はじめたんだけど、浅倉さんはもう固定パーティーとかいる?」

「ん? うん……まあね。いつも同じ人たちと回る……かな。それに潜つてる時間もそんなに長くないから、椎野君とはニアミスしてないかもね」

バツキヤロー! いつも一人の一匹狼だよ。それでもここ何ヶ月も負け知らずだよ! パソコン開けてる間中ずっとゲーム漬けの傍若無人冷徹残酷大魔法使い様だよ!

しかも うわヤベー ハンドルネーム100%広まつてゐるよ。ハンネ言つたら絶対ばれちやつて 色々とムチャやりすぎたからなー

こんな日がくるならネット上でもむづちゅつとおしどやかにじとくんだつた。

でもそれじやあ稼げないし。私今、頭の回転物凄く速くなつてゐる気がする!

「ん~ じゃあハンドルネーム聞いても分んないかな…… といつて浅倉さんの下の名前つて珍しい字面だけど、なんて読むの?」
し、し、し、しまつた! こんな日が来るなんて思いもよらなかつたから下の名前ハンネそのまんまでよ~ でも本名教えないつて無理だろ、職場の人間関係上。

「さつきも宇賀さんに聞かれたんだよね。笑わないでよ。ミニカ…
…。浅倉小娘あさくらみにかつて読むのよ」

言つた、遂に言つた。もう駄目だ。絶対ばれてる。下品で暴虐な大魔法使いの正体がいま解き明かされてしまつた。

椎野君は何かに気付いた様子で下を向いてふふふと小さく噴出した。必死に笑いを堪えていくように見える。

おひまで、せめてリアクションはこつちに見せてくれ。反則だ。
いや、ごめん。なんかこの前アクセスしたときに似た名前の人があ

居たような気がしたんで……」

「ハイ、それ間違いなく私。トリッシュの酒場でもアロウの街でもミーカは私一人しかおりません、ハイ。

ただ『リーマス』の世界は広いから、椎野君がアロウ以外のまつたく別のエリアに毎回アクセスしてゐるなら他にもミーカサンいるかも知れませんが。いまんとこ同名にはまだ会ったことございません。私の名前が他のエリアにも轟いてる可能性なら十分ありますか。

「僕いま、アロウの街から入ってるんだ」

「ほらね。その周囲でミーカは私だけ。ハア～

「このまえす』』『アクシデントイベントが発生して、そのときたまたまたいたんだけ」

「それ宇賀さんの話でも出たけど、昨日の『じじやない?』

咄嗟に聞いてしまった。

「よく知ってるね。浅倉さんやつぱりあの場にいたんだ?」

「あ～、やぶ蛇。

そのとき椎野君の名札がチラと目に入った。退社時に外し忘れたらしい。

「椎野君の下の名前もけつこいつ珍しくない? 始めて見る字面だけど……」

後で思い返すと、『じじ』が運命の分岐点だったのかも知れない。

「うん。自分でもそういう想つ。全国探しても殆どいないんじゃないかな。大きい兄つて書くの。椎野大兄つて書いて、『じいのトニー』つて読むんだ」

さつきまでとは違う角度で、私の脳はまたグルグルと回り始めた。

1+3

初めてのデートになるのだろうか？

仕事終わりに椎野君と入った居酒屋は24時間営業の明朗会計、極めて健全な食事とちよつぴりのアルコール。

そして、そしてそして、このわけのわからない胸の高鳴り……

……て、待て。

ホントーに、ホントーに恋なのか？ これ。

元引きこもりの私は、近所のおじいちゃんに挨拶するだけでもドキドキしてたんだあ。ああ、もうほんとに今日はビビつなるんだろう。セルフコントロール、セルフコントロール。

お店に入るとすぐさまお手洗いに直行。お化粧を直すと同時に自分が納得させる材料を探して5分ほど固まってしまった。

話は30分ほど前の、場所は会社の事務所前。椎野君にタイムレコードを押してもらつた直後今まで遡る。

「し……いの、トニー…… しのトニイイイー？？！」

突然叫ぶ私。田の前の椎野君の頭上に特大の疑問符。

「僕の下、変わってるだろ。多分日本中捗してもそんなにはいないと思うよ」

「た、たぶんいないよ。そ、うだよ、そ、う……、……て、そ、うじやなくて、あの」

悔しいけど言葉がうまく出でこない。なんでリアル社会じゃこんななんだ私。

我ながら歯がゆくて仕方が無い。がんばれ『リーマス』の大魔法使い！ 今のおまえは五重苦の女の子じゃない。高身長・豪腕で最

強の武器防具と最凶の魔法を使いこなす悪口傲慢な魔法使いだ。

いけ！『椎野君、昨日大魔法使いミニ一力と一緒にいなかつた？』

つて質問してやれ。

い、いや、そうじゃなくて、そ、そつだ『昨日の夜、ビニにいたの？』つて聞くんだ。

「ところでミニ一力、お腹空かない？ お給料がまるつきり安いんで、課長には聞こえてないよね。そんな大したところには誘えないんだけど、良かつたら近所で飲みに行こうよ。もう働いてるし、未成年だと少しくらい大丈夫だよね」

私が背中に汗かいて必死で言葉選んでるときにこのせわやかボイイーじや対応し切れないじやないか。

えーん、もう泣きたくなつてきた。

「そ、そうね。少しくらいならね。お、お酒？ の、飲んだことあるわよ。あの、実家にいるときお母さんと一緒に梅酒をちょっとぴり

……

あーもう何言つてんだ私は。

「ならもうひとつくに体験者だね。僕は社会人になつてからなんだ。アルコールは脳の働きを抑制するつて、昔煩く言われててさ。だからお酒もミニ一力の方が先輩かも」

……て、椎野君、すつかり私のこと下の名前で呼んでるじやん。もう、余計緊張しちゃうよ~

「そ、そうだね。仕事もお酒も私が先輩でよかつたあ。だつてだつてほら、片方だけ先輩だといろいろややこしいじやない！」

バカか私は。もつとマジなリアクション無いんかい。やっぱリアルな私は五重苦だあ。

程なく私と椎野君は会社から徒歩10分ほどの大衆居酒屋に着いた。

話の主導権は殆ど彼が握つたままだが、楽しくない訳じゃない。

つか単純に楽し—じやん。

話題はゲームから音楽や映画など他の趣味へ、はたまた会社や仕事のことまであちこち飛びまく。つかえながらも私いつもより上手に話せる氣がする。彼のエスポートが上手いのか、私が成長しているのか、もうそんなことどうでもいいや。

とにかくなんかす—じい胸が高鳴る……これってひょっとして……

「ところでミニカのハンドルネームって何？ ひょっとしたらいへん最近オンラインで会つてない？」

「え？」

浮かれた私に椎野君からの不意打ち。今こいでその話題？ もう流そうと思つてたのに。

会社は明日も明後日もずっとあるわけで、彼とは毎日のように顔合わすわけで、こんなことならもつとおしとやかなキャラを演じとくんだつた。ハンネ顔見せ無しだからって男勝りにやり過ぎた。ゲーム内とはいえ惨殺も散々やつたし。男キャラが引くくらいの残酷非道もしばしば。今彼がそれを知らなくとも、ハンネばれちゃえばトリックショの酒場に来てる他のバカどものおしゃべりでいざれ全部筒抜けだよ。もうなんか涙出しきそう。

「僕この前すごい女魔法使いに会つたんだ。屈強な上に魔法も万能なんだつて。そいでもってなんとその人のハンドルネームが……」

あ～ マジヤベー、もうだめだ。これ以上隠し通せない。う～ん。「良かつた事！ そりそり、ネトゲやって良かつた事つて椎野君どんなどある？」

いきなりの話題転換。呆然とする椎野君。どんだけ話の切り替え下手なんだわたしや。

「うん…… いいよ。じゃあミニカからビーナス

椎野君の声のトーンが若干下がつたような氣もするがどうあえず回避成功。

「私は結構キャラ長いしリーマスに思い入れ深いんだ。長くなりそうだから椎野君先に言つてみて」

「残念だけど無理だよ。ネトゲに関してはまだ辛い事の方が多いからな」

椎野君は私から目を逸らして溜息混じりに言つた。その一言で弾んでいた会話は止まり、場の空気は濁んだものになった。

「さやひー、これってやっぱり私の会話スキルが低すぎるせい？元引きこもりの限界か？ そんなつもり全然無かつたのに〜

「う、うう、うめんね。そんなつもりじゃ……」

「いいんだ別に。ミニカはしゃべること沢山あるんだろ？ いいよ、どうぞ」

「う、うん、私はね……」

私はそこから不自然なほど饒舌に喋つた。場の空気を変える為？「うん、それだけじゃなく。

リーマスへの思いをリアルで語る事は、私自身にとつても大きな癒しだつたから。これまでゲーム内でどれほど評価されようとも、現実世界でそれを聞いてくれる者は一人もいなかつたから。

自らを鍛え、自分で稼ぎ、他人と協力して何かを為す作業。そのすべてを私はリーマスの世界から学んだ。その世界で私は、賢者、偉人とすら呼ばれるようになつた。

リアルマネートレードのことも今日初めて他人に喋つた。

椎野君は最初ぼんやりと聞いていたが、私が一所懸命喋ると徐々に笑顔を見せてくれるようになつた。最後の方は身を乗り出して、まるで自分のことのように聞いてくれた。

私は生まれて初めて自分の考えをめいっぱい他人に語り、心の底から満足した。

「以上です。ありがとうございます。全部聞いてくれて」

でも、椎野君自身はどうなんだろう。

「じゃあいよいよ僕の番か。僕にとつてリーマスは……」

「リーマスは？」

彼のテンションがいきなり下がる。なんで？ サっきまであんなに楽しそうに聞いてくれてたのに。いったいリーマス内でどんだけ

嫌なことがあつたつて言うの？

「アイデンティティーであり、且つ悩みの種かな……」

「え？ それって良かつた事じゃないじゃん」

「仕方ないよ。人それぞれでしょ。僕の場合はそうなの」

「何かないのぉ……？」

「ところでミニカはリーマス世界が壊されそうになつたらどうする？」

「え？ もち、全力で守るケド」

「守れなかつたら？」

「はつは～ん、椎野君。素人さんはそう考える。しかし私はそうは思わない」

「なんでそれは思わないんだよ」

椎野君にまた笑顔が戻ってきた。よ～し、もう一押し。

「真の実力者には敗北などありえないからだよ。わつはつは実は私かなり酔つ払つてるのかな。でもいいや。

「リーマスがなくなればいいと思つてる人だつているかも知れないよ」

「え～ なんでそういうこと言うの？」

「例えばの話だよ。それならどうする？」

「リーマスの良さを分つてもらつまで小一時間語りまくる

それを聞いて椎野君は大爆笑。勝つたのか？ 勝つたのか私は？

「ミニカならやりかねないな。小一時間どころか一晩中でも」

「椎野君がネガティブすぎるんだよ。私なら身を挺してでも世界を救うね。下つ端の奴等から順に救つちゃうからねホント」

それを聞いて、椎野君の瞳からスッと熱が消えた。

「リーマスはマルチインターフェイスで視聴覚触覚は殆どリアルと同じになつてるんだけど、本当に下つ端から救うなんてできるの？」

「自分が傷ついてでも？」

椎野君の瞳は無限の深さで私の勇気を試してくる。私はまるで千尋の谷を覗き込んでいるような気持ちになつた。

「椎野君、そ、そんなマジにならなくて…… 出来るわ。たぶん
だめだ、せつかく明るく振舞えてたのに元引きこもりの本性が出
ちゃいそつ。

そこへ店員さんが生中を一つ運んできてくれた。ナイスブレイク
店員さん。

「ハイ、じゃあとりあえず乾杯しようか。ミニカ何か無い?」
「え、と、あの、じゃ、じゃあ、せつかくだから何か考えて、えと、
何でもいいから、そ、それに乾杯する?」

何を言つてるんだ私は。声が震える~ たゞすゝけ~

「んじやあミニカの勇氣とその勇氣に守られるべき夢を世界に……
うわーん、なにそれ? なんかまだ若干怒つてる~

「せーの……」

「「かんぱ~い!~」」

なんか涙出でた~

その後は会社の愚痴やら社員さんの噂話で盛り上がった。店を出
る直前には酔いが回りすぎて私はもう何を言つてているのか自分でも
分からなくなつていた。

椎野君に別れを告げてなんとかタクシーに転がり込み、運転手に
住所を告げるとそこはもう亞空間をさ迷つているような夢心地。
時間の感覚まったく無視で途切れ途切れの意識の中、椎野君との
話を反芻してた。後半はほとんどがどうでもいいような同僚の噂話
だつたけど、椎野君自身のことも話してくれたんだよなあ。ええと
どんな内容だつたつけ。相当お酒が進んでから話し出すんだもん椎
野君たら。とても覚えてらんないよ。でもかなりプライベートなこ
とも言つてたような。

ん~と……

「たしか椎野君と、お父さんの会社が潰れて家族がバラバラにな
つたんだよな……」

内容は覚えているのに、その場ではその意味するところをまったく理解していなかつたというどうしようもない聞き手。あ～私ってマジ最悪。酔いに任せて彼が傷つくこと言つてないわよね。

「彼自身けつこういいところのお坊ちゃんみたいなのに、不幸にも今みたいな職場で、私みたいなのと一緒に飲んで」

今みたいな職場でつて、会社に対してかなり失礼だよなあ。でもまあ派遣だし。

他の人と飲むときはマジ気をつけなきや。私つてアルコールが入ると節制が効かなくなるタイプなのかも。下手すりやクビだよ。でもこのふんわかした感じ気持ち良い。

このタクシー私のマンションには向かわなくても良いから朝まで走りつづけてくれないかしら。でもそつすると一晩で私の月給吹っ飛んじゃうわね。

あ～ 思考に脈絡ねえ～

「そんな大変なことがあつたのに、何で彼はあんなに良い人でいられるんでしょう？ まったくの謎です。ハイ、運転手さん、どうしてでしよう？」

運転手さんに絡むなんてほんとにマジ最悪の客だ私。普段は近所のじいさん相手でもあがつちゃうくせして。

「それは彼があなたのことを好きだからじゃないんですか？」

運転手さん最高。社交辞令でも上手すぎまる。酔つ払いの私は酒でも言葉でもいまメロメロダヨ～

「それはない。そんなことはないよ。それに、その氣があるなら普通送るでしょ相手の家まで……」

心とは裏腹にわざわざ一度否定する私。

「警戒されると思つたんじゃないですか？ それか何か外せない大事な用事があつたとか。

それに職場が同じ人なら、またいつでも誘えますしね

「それだ、それ！ いつでも誘えるんだから無理に迫る必要ないよね、ね。そうだよ。たしかに彼なんかいつも忙しそうだし。でも今

田はなぜか誘つてくれたんだよね~

……のわりにこのあつたりした引き際はなんだあ~？ こりあ、
しこのトニー！ 出でここー！ おひらー 出てきて送れよこのお~
もう我ながら何を叫んでるんだか…… 運転手さんごめん。

「トニーさんつて言つんですか、変わつたお名前ですね。その方に
彼女さんはいらっしゃらないんですか？」

「え？」

息を呑む私。

しばし沈黙が流れた。

運転手さんもまずいことを言つたと思ったのだろうか。首をすく
めて萎縮しているのが後部座席からでも分かる。

「え？ 会話の中すでに聞いてるのかと、そのトニーさん彼女い
るとかいないとか……」

「え、えぐ、えぐ……」

何これ、わけがわかんない。田から水が、俗に言つて涙が溢れてき
て止まらない。

「ふええ～～～ん、ふええ～～～ん、ええ～～～ん

まるでいじめっこに泣かされたような泣き方。そつやつて泣く私
自身を客観的に見てる私の中の私。

それでも涙は制御できず次から次へと溢れてくる。それをバック
ミラーで見ている運転手さんはもうまるで犬のおまわりさん状態。

運転手さんマジめん。でも自分の力じゃあどうしようもないん
だ。

まさに酒の魔力。号泣の魔法にかけられたみたいだ。大魔法使い
の名譽にかけて次回までには酒の解除呪文、酔い覚ましの「デスペル
」を覚えときますです。

「はい着きましたよ」

自宅前に着いて下車を促されても、私はまだ泣いていた。
まるで耐久レースにチャレンジでもしているかのように、最後は
無理から泣いていた。

なんだよ意地かよこうなつたら。しゃくりあげながらもきちんと料金を渡し、ちゃんとお釣りも確認してから降りる私。ほんとギヤグだよもう。

タクシーが行ってしまい、鍵を開けてマンションに転がり込むと憑き物が落ちたように涙が止まった。そもそも大した理由も無いのに泣きすぎる。それか、いろいろなことが一度に起こって神経が昂ぶつっていたのか？ その可能性の方がまだ高かろう。

なんせついこの前まで引きこもりの社会不適合者だったのだ。上手く就職出来たからといってすべてをそつ無くこなすなんて出来るわけがない。

必ずどこかにしわ寄せや歪みが出てくるはずだ。じゃないとバランスが取れない。おそらくずいぶん無理してたんだ私。でも涙を流すような内向きの方法でバランスが保たれるなら安いもんだ。秋葉原に車で突っ込んで他人を傷つけなくちゃバランスを取れないやつもいるんだから。

いや、あれはバランス崩したからああなったのか？ ええいもう良く分からん。

「椎野君家つてそんなに大変な目にあつてたんだ……」

自分の口がため息混じりにしゃべり出すのをもつと高いところから靈魂だけで聞いているような気分。

「辛いことも過ぎたこととして他人に語れて、明るくやさしく振舞えて、ほんとすげになあ」
涙が止まつたら今度は独り言が次々と溢れてくる。
「ホントに彼、彼女いないんだろうか？ 運転手さんが言つてたとおりだと良いなあ」

そう言つておいて、自分で自分の言葉に赤面した。
独りきりなのを良いことに頭の中身をぽつりぽつり口に出す。誰に聞かれることも無い。口に出すたび少しづつ心が軽くなる。
「都合良く考えすぎると後で現実とのギャップにショックが大きすぎるとからね。妄想はほどほどに、慎重に考えなきゃ……」

少しづつ酔いが覚めしていく頭を壁にもたせかけ、そのまま床に腰を下ろして中空をぼうっと眺めた。考えを整理しようとするとがまつたく論理的にならぬ。

「今彼なにやつてるのかなあ。今よりもっともつと分かり合えるようになれば、彼と付き合えるのかなあ……」

彼と付き合つ?

独りきつつの部屋のなかとは「え」ことを口に出して言つて、自分自身に驚く。

「かつての引きこもりクイーンは新しい魔法を身につけた、か?」酔いは少しづつ覚めてきたが、興奮しているせいかななか眠くならない。

そもそもが夜更かし癖なのだ。本来ならこの程度宵の口。二年以上もこんなに早い時間に寝たことは殆どない。長年の不摂生によつて体内時計が間違つてセットアップされてしまつてはいるんだから眠くなるわけがない。

時刻は深夜。

時間を追つ、と沂えていく意識に觀念し、パソコンの電源を入れた。

酒が入つてこようが明日仕事があつうが、眠くならないものは仕方がない。

色々なモヤモヤも『リーマス』の世界で憂を晴らしだ。

アロウの街角に大魔法使いミニカのヴィジョンが浮び上がった。異世界で尊敬と畏怖を集め、傍若無人に振舞うヴァーチャルなもう一人の私。

この世界のヴァージョンで取得できる限りのハイレベルと呪文数を誇る最強の魔法使い。

漆黒のマントに赤の内張りが翻り、背中に吊つた大剣ワルギスが怪しげに揺れる。

街は今日もいつもどおりの喧騒に包まれている。

一般社会が静まり返ったころからオンライン世界はもつとも騒がしくなつてくるのだ。

行き交う通りではタスク参加のためのパーティーメンバー集めや武器防具の交換が行われている。

勝手に店を出しているものもいる。

ハンティングが性に合わぬと完全に商人に転向してしまったものもいる。

酒場のガウも以前は一般プレイヤーだったらしいが、今は一介の情報屋として側面から他のプレイヤーが苦しんだり活躍したりするのを眺めている。まるで隠居じじいだ。

たとえ商人や情報屋でも金だけを集める目的ならやり方次第、戦わなくても十分だ。

『リーマス』の登録者数はぜんぶで150万人超。同時に参加するのはおよそ10万人～20万人。タスクが一巡した街まですべて含めると人が集まる街や村は100箇所を超える。これらがすべて自分の顧客になる可能性があるのだ。バトルやタスククリアなんか

よりよっぽど効率の良いビジネスチャンスも隠されている。私はそこまで頭良くないので主にタスククリア専門だが。

さすがにリアルで酔ってるし、バトルやタスククリアは今日は無しかな。みんなを冷やかして回ることにしよう。

甲高い叫び声と群集のどよめき。トリッシュの酒場に向かう私の足を路地裏からの悲鳴が引きとめた。

ストリートファイトをやつているようだ。ただし、ただそれだけなら私の足を止めるには不十分。この手のファイト、中途半端に強くなつたときは私もよくやつたものだ。が、今では誰を相手にしてもただのいじめになつてしまつ。

うつかり『リーマス』をやり始めたばかりの新人を半殺しにして身包み剥いでしまうと、彼らはもう一度とログインしてくれなくなるかもしれない。娯楽は他にもたくさんあるのだから。そのため今私はもっぱら糧を『世界からいだく』ようにしている。

そのとき私の足を止めたのは、もうすでに勝ちまくつて失神者の山を築いている人物。顔はマスクで隠され、あだ名・名称の欄もUNKNOWN（設定できる）。そのやり口は残忍無比。もう一度とログインしたくないと思った挑戦者も多かつたろう。

一回の掛け金は2万ギル。勝てば倍になるが、失えば初心者にはかなり痛い金額。持ち物で払わされている者も大勢いた。普段なら気にもとめないこの出来事。ただこの数は尋常ではない。さらに奴は、昨日のトニーとまったく同じ背格好で同じ服を着ていた。

「あいつもう一時間以上もやつてゐるんだよ。30人以上はぶつ飛ばしてゐんじゃないかな」

隣にいた僧侶風の男が教えてくれた。

「下手に戦闘系じゃなくて良かつたよ俺。ひつかかるところだつた」

トニーと同じ服を着た男が私と僧侶が話しているのに気づいた。

腰に左手を当て、胸を張つて右手の中指を立てる仕草。勝負に来るよう兆発している。

奴がどのくらいのキャリアか知らないが、もし長くこの世界にいるのなら私のことを知らないわけがない。それを承知で誘っているのだろうか？　いや、ありえん。

基本的に『リーマス』の世界は何でもありだ。

一定の条件下での決闘や賭け事、両者間に了解があれば何をやってもいい。

しかし実力者が、このゲームに参加してまだ間も無い者に結末の見えた勝負を持ちかけて金品を巻き上げるというのは、このゲームを愛する者から見てどうか？

ある程度以上の実力が備わった者はトリッシュの酒場で参加金を支払ってタスクを買い、それをクリアすることで金品を得るべきだろ？。初心者に配慮するのは上級者として当然のノブリスオブリージュ（高位者義務）だと考えられるし、それ以前に私はこのゲームを心底愛しているから。

大魔法使いミニカは普段は保安官を気取るガラジヤ無い。風紀を正すつもりなどさらさら無かった。しかし自分自身が長年青春をかけて積み上げてきたこの世界の倫理を乱されることが、単純に腹立たしかつたのだ。

このとき私の脳裏には職場の同僚でさつきまで一緒にいた優男の映像は思い起こされなかつた。酔いの所為もあるのかもしれない。

トニーと同じ服を着た仮面の男が顎を軽く突き出す。

二人にとつてはそれだけで十分な合図だつた。

大剣に手をかけるまでも無い。私は隣のクレリックが持つていた10インチほどの杖を指先でひつかけて投げ放つた。ゴングは鳴つた。

軽くかわす仮面の男。後ろの壁は弾丸の様に突き立つた杖で粉々に打ち碎かれた。その破片が噴煙のように舞い上がるのを振り返ることなく、オープンカフェの小皿を指で挟んでミニカに向けて投げ放つ男。非常に滑らかな動きだ。

空中で受け止めてやろうかと思ったが、そのあまりの威力に危険を感じ、ギリギリのところで避けて後方へ見送った。

私の直後、皿が当たったところは木材がえぐれ煙が出ている。ありえないだろ。いつたいこいつのパラメーターはいくつなんだ？ 私はこの世界最強の魔法使いなんだぞ。

挑戦の掛け声も同意も無い戦い。超高速の投げ物の応酬に、いまだ外野が誰も巻き添えを食らっていないのが不思議なくらいだ。あの威力、破片に当たつただけで低レベルの者なら間違い無く『死ぬ』。

「「「マヌテュオバクール！（魔の過冷却）」」」

仮面の男がはじめて叫んだ。

周囲で見物していた者達のうち、呪文の意味を知っている者はすぐさま回れ右をして必死の形相で逃げ始めた。間に合わぬと思った者達は即座に中和の呪文を口にした。

それでも8割がたはレベルが低過ぎたりそもそも呪文の意味を知らなかつたりで、魔法効果の直撃を食らい、そのまま絶命した。

「レビトラ＆プロテカ！」

即座に呪文の意味を理解した私はその場で浮揚し、周囲に球形の防護壁を張つて魔法効果の進入を食い止めた。

「狂つてる。この状況で過冷却を使うなんて……」

魔の過冷却が恐ろしいのは魔法伝達と効果発現に絶妙な時間差があるところだ。直撃を受けると体表や手足、脳等に先んじて体の中から凍り始める。術の被害者は動け、また思考できる状態で1~2秒間自分の心臓が内部から凍てつき停止していく様を眺めることになる。その絶望感は想像に難くない。

空中から惨劇を見下ろしつつ私は愕然とした。

武器や魔法の纖細な使用感を得るために、殆どのリーマス利用者がタッチスキンインターフェイスを使用している。これは触覚をリアルに近づけるためのもので、健常者でも大ダメージが伝わると激痛のあまり気を失つたりPTSDになつたりすることがある。

心停止のおそれもあるため心肺疾患有病者には使用が禁止されているほどだ。直撃で即死したプレイヤーのリアルな健康状態が危惧される。

リーマスでは取引や決闘は自由だが、それには最低限のルールがある。

街を大規模に破壊してはならないし、周囲に大きな影響を及ぼす魔法を使ってはならない。それでは荒野でタスクをこなしているのと同じじゃないか。

「「「なるほど、やるな……」」」

バリアの中にまで仮面の男の声が響き渡つてくる。声にはリバーブがかかり、声紋解析の呪文がつかえなくなっている。

「おまえ何者だ？！　名を名乗れ！」

名乗るつもりなら最初から仮面などしないだろ？。我ながら馬鹿げた質問だ。

しかし奴のプロテクトは堅く、私の魔法力をもつてしてもおいそれとは突き破れそうも無い。くそう、いますぐ仮面を剥いでトニーじゃないことを確認したい。

もし、万が一椎野君と同一人物だつたら……。私をタクシーに押し込んだ後『リーマス』に乗り込んでやりたい放題荒していたんだとしたら……。許せないかもしね、彼を。

街中のマヌテュオバクールの使用だけでもとんでもない倫理違反だ。いつたい管理者は何をやつしている？

「「「不意打ち以外であなたを倒せる者はかなり少なそうだね。この世界で最強の魔法使いさん」」」

仮面の男は、私を大魔法使いミニカと知つていてあえて向かってきたのだ。

「あなたの目的はなんなの？」

「「「さあね。だいたいあなたの知つたこつちやない、だろ？」」」

「目的の無い行動などないわ。言いなさい」

「「「あえて言うなら、この腐った世界をぶつ壊すことかな」」」

その言葉を聞いて私は無性に腹が立つた。

「腐ってるってなんて言えるの？」

私はこの世界に救われた人間だ。

当時、引きこもりの社会不適合者浅倉小娘にとつて、ここは自身の存在を唯一確認できる所だつた。ここで初めて私は他人と会話し、働き、稼ぎ、そして後輩達にちょっととしたコツなどを伝授してきた。入つた時期が良かつたのもあるだろう。私は運良くこの世界最強の魔法使いとまで言われるようになつた。しかし、いま現在『そういうた救い』を欲しているのは、まさに最近このゲームに入ってきたばかりの、仮面男がさつき殺したような連中なんだ。

今、私の目の前にいるこの男。そしてやり込んでいるように見えないのにどう考えても強すぎる。そして強さの源泉がまるで見えない。不気味だ。まるで世界の根本原理に触れるかのような怪しげな迫力。最高位の私がいまだかつて出会つたことの無い敵。私のことなどどの程度まで知つてているのやら。

「表に出ろ！ 試してやる」

とにかくこの男危険だ。戦闘するにしても路地裏ではもてあます。私は浮遊したまま先に街の外へ飛び出した。

「――レビトララ！」

背後で男が浮遊呪文を唱えるのが聞こえる。
少し飛ぶとアロウの街からもつとも近いタスクポイント、ラオル山が見えてきた。

私はラオル山麓に急降下し、奴が到着するまでの時間差数十秒間で15個のトラップスペルを瞬く間に張り終えた。これが私の得意技のひとつ。超高速呪文のため舌先が少しヒリヒリする。ともあれ準備は万端。

さあこい、仮面の無作法者。格の違いつてやつを見せてやる！
仮面野郎は私のすぐ上まできて、いったん上空で待機した。やはり警戒しているのか？

見上げると、そいつの周りにスペル詠唱前にできる呪念度の濃淡

が発生している。

「 まざい！ レビトララ！ ！」

私は再度舞い上がり、超高速でそいつの高度を追い越してそらに上空へ抜けた。眼下ではまさに詠唱が完了するところだ。

「 『マヌテュオバクール！』 』

仮面野郎は私が舞い上がるのもかまわず、もともと私が立っていた場所に過冷却を打ち込んだ。

また過冷却か…… マヌテュオバクールのような高等呪文を知っているくせに攻撃 자체が単調過ぎる。レベルは高いくせに戦闘経験が不足しているような奇妙な違和感。

奴が過冷却を打ち込んだ所為でせつかく仕掛けたトラップスペルのいくつかは無効化されてしまった。意図的なのかそうでないのか、行動に隠された意図が読みきれない。

「 ブリンガル！ 」

私は取り寄せ呪文で奴のベルト後方に魔力のフックをかけ、そのまま急降下して地面の直前で離した。私自身は再び上空へ、仮面野郎は大音響と粉塵を巻き上げて地面に直撃した。プロテカを張る暇は無かつたはず。これはかなりのダメージを期待していい。

仮面野郎が直撃した地面は直径数メートルに亘って抉れ、奴自身は土砂に埋もれてその中心にいた。

もう動けないかと思いきや、粉塵が収まるとそいつはのそりと起き上がりってきた。

動きがおかしい。あれだけの激突の後なのにダメージがあるように見えない。

奴は朝起き抜けの気だるさのよう、しかしそうかりとした足取りですぐに抉れた穴の縁まで上がってきた。

「 素晴らしいタフさ加減だ。しかしとかんせんのろすぎるー ！」

私は奴に聞こえるようにあえて大声で叫んだ。何の事は無い。私は恐ろしかったのだ。

一 地方の統治者クラスを相手にしても私が恐怖を覚えることは殆

ど無い。

予測できぬ恐怖。この男の恐ろしさは暗闇が持つ恐怖と質が同じなのだ。

私は上空に待機したまま、呪念度の高まつた指を立て続けに鳴らした。途端に残つたトラップはほぼ同時に仮面野郎の上に降りそそいだ。

なぜだ？

仮面野郎はまるで罵のほうが避けてくれているかのように慌てず騒がず、平然と地上に戻ってきた。

辺りには空振りで他の場所に当たつて弾けたトラップの魔法煙が立ち昇つている。

まだ10個近くのスペルトラップが残つていたはずなのに、その全てがほぼ同時に炸裂しているはずなのに。私は首筋に氷柱を押し当てられたような寒気を覚えた。

奴は上空にいる私を見て仮面の奥で不敵に笑つた。私があわててバリアを張ると仮面野郎の影はフツと薄くなつた。しまつた。逃げる気だ。

しかし氣づいた時にはもう遅かつた。私がバリアを解除して追いかけようとするが仮面の男はすでに残像を残して消えていた。

トラブルで注意を集め、街中で戦いに誘い、不意をついて使用不可の魔法で急襲。

妙に高度な呪文を知つているかと思えば、使い方が単調でどう見ても戦い慣れしているようには見えない。そしてトラップが効かない。

ある程度試すとすぐさまログアウトして逃げる。計画的かつ大胆。

私の中に当然思い起されたるべき顔と名前、その彼に対する思いが堰を切つて溢れ出した。

『こんなの椎野君じゃない！』

大声で叫びたかった。だつてつさつきまで一緒に飲んでしゃべ

つてタクシーまで送つてくれたじゃないの。絶対ありえない。

それによく考えたら私、椎野君のハンネだつて聞いてない。

昨日会つたオンラインのトニー。同じ会社に勤める椎野大兄。トニーと大兄はまったくの別人で、今日の仮面野郎はオンラインのトニーを騙る偽者？

でも、でも、万が一ひょっとして……トニーってそもそも今リアル社会を騒がしている凄腕ハッカーの名でもあるんだよね。

ということはこつちのほうが本当のトニーの姿？ トニーの本性？

でもそんな偶然であるのかしら。いくらでも表示名を変えることが出来る場所にわざわざ同名で現れて目立つ行動取るなんてさつぱり分からぬ。

ハッカーの愉快犯的行動特性？ それにしたつて昨日のトニーと印象が違いますぎる。

もう何がなんだか……

帰つてきたアロウの街路。

考え事をしながら歩く私は周囲からどんな風に見えているのだろうか……

最初遠巻きに見ていた僧侶や魔法使い達は中和魔法を唱えながら周囲を片付けている。

急激に凍らされた机や壁材は割れ、湿つて歪んで完全には元に戻りそうもない。

過冷却で即死させられた者達は数十名。殆どはマルチインターフェイスを使用していたはず。プレイヤー達の安否が心配だ。

私は片づけをする者たちにはかまわずその場を離れ、周囲も気にせずつづろな顔でブツブツ独り言を言いながら、そのままトリッシュの酒場に向かつた。

タスクをこなすわけでもない。特に目的は無い。とにかくどこか目的地が必要だった。

「そのままログアウトしたって絶対眠れるわけないんだから。

酒場ではキッドが迎えてくれた。カウンターの周りはタスクを買にきた客とタスククリアのためにパーティーメンバーを探しにきた客でごった返している。

酒場とはいえネット上なので実際に酔えるわけではない。

酒場の機能は旅の拠点であり、装備や仲間の補充基地なのだ。

「この時間にガウが来てないなんて珍しいわね。キッド、お留守番ご苦労さん」

私はかわいい仕切り屋さんに声をかけ、ノンプレイヤーキャラ独特のパターン化した返答に耳を傾けていた。

そうしている間にカウンターの向こうの画像が揺らぎ、ガウがログインしてきた。

私は『助かった』と思つた。とにかく話し相手が欲しかつたからだ。

ノンプレキヤラ相手じゃあ文字通り話にもならない。

「遅かつたじゃないのガウ。タイムレコーダー押していくる?」

「勘弁勘弁。仕事が長引いちゃつてね。風呂入つてビールの一本も飲むともうこの時間だ」

「まったくムードも何もない返事するんじゃないよ。せっかくファンタジー空間を満喫しに来てるのにぶち壊しじゃないのさ」

私は大魔法使いを気取つてわざと不機嫌に詰つた。

しかし本心では生身の話し相手が来てくれたことが心底うれしかつた。

私はカウンターに座つてダブルを一杯注文した。情報を得たいときここではみな酒をたのむ。高い酒を頼むほど、おいしい情報や困難で高収入なタスクが提供されるという仕組みだ。ただし飲んだからといってライフが戻つたりパラメーターが上がつたりすることは一切無い。

「実は南に30キロほど行つたところに『無限の裂孔』と呼ばれる

地割れが存在する

ガウが仕事モードになつて話題を振つてきた。

今回の『アウル街編』になってからもう1年以上が経つ。小さいタスクは粗方解かれてしまつていて、もうそろそろ本編達成タスクが提示されるころだ。それがどういうものかは達成されるまで誰にも明かされない。

つまり解いて見なければ分からぬのだ。

タスクは終盤に近づくほど長く困難なものばかりになつてくるので、ふつう同時に複数のタスクに挑戦することはできない。終了間近のタスクはひとつにとりかかると軽く一週間から長いものだと一ヶ月ちかくかかってしまう。

だから終了間近では、タスク名からどれが最終タスクかを推理して取りかからねばならない。最終タスクとそうでないものとの大きな違いは報酬と特権だ。

一時金は他の大きなタスクと似た額だが、最終タスクを解いた者にはその街でのタウンマスターの称号が与えられる。タウンマスターにはその後行われるイベントに優先的に招待されたり、自分でイベントを企画したりする権利が与えられる。つまり後々まで有利な情報で稼がせてくれるというわけだ。それにタウンマスターは参加者全員にその存在が知らされるので、パーティーを組むとき優先的に声をかけられたりアイテムトレードでも一目置かれる。

どうせタスクに取り組むのなら最終タスクを選びたいと誰もが思うのだ。

大魔法使いミニ一力はすでに7つのタウンマスターを取得している。150万人が参加するこの世界でわずか百数個のタウンタスクのうち単独で7つ持っているのはミニ一力だけ。

史上最高だ。

この世界に関する限り、私ことミニ一力は間違い無く最強最高の魔法使いなのである。

『無限の裂孔』タスクを語り終え、ガウが通常モードに戻った。

ガウとはこの街が出来る前からの付き合いだ。教えてもらつて良いことはなんでも気さくに聞けるのだがさすがにタウンタスクについてはトップシークレット。絶対に教えてくれはしない。

ガウ自身も昔はタスククリアを狙う一般プレイヤーだつたのだが、ある時期から酒場店主兼情報屋の仕事に就くようになつたらしい。

リーマス内では他にもショップや仲介屋、代行屋や傭兵など様々なものに転職でき、街の運営にも携われるようになつてている。

ただ、やはり戦士や魔法使いになつてタスクをクリアしていくのが本道で最大の楽しみ方であることに疑いはない。

あるいはおそらく情報屋や街のスタッフ自身もゲームの根幹に関わることは教えてもらつてはいらないのだろう。街のスタッフや便利屋業は、レベル上げやタスククリアの競争には疲れたけれど何らかの形でこの広大な世界と触れ合つていて、もしくは今まで一緒にだつた仲間と離れたくないという人向けのおまけ的なサービスなのだ。

つまりゲームが苦手な人でもいつまでも気軽にログインできて、末永く楽しめる道をちゃんと残してくれてあるのである。

「ありがとうございます。でも実は私はリアルで酔つぱらつちやつてるんだ。そろそろ疲れたし眠気も襲つてきたんで今日はもう落ちるわ。でも近いうちに参加するから今日中に登録だけしといて」

私は目を擦りながらあぐい顔でガウに伝えた。

「いいのかい？ 待つてる間にまたラストタスク臭いのが出てくる可能性もあるけど

「そんときやこつちを急いでクリアしてからそつちに向かうよ」

「さすが大魔法使いミニカ様は余裕だねえ」

ガウはいつもこんな風に言って私をからかう。

「もうがつつかないようにしてるんだ。このタスクも相当難易度が高いことは間違ひ無いし。タウンタスクを他の奴に持つてかれるなら縁が無かつたつてことよ」

私はそう言つてマントを右腕で後方になびかせ、踵を返すと店の出入り口に向かつて歩き出した。大魔法使いミニカが大剣を揺らしながら歩く姿は周囲に相当なプレッシャーを『えるらしい。私の進行方向の人海がざつと左右に割れた。

それを見て誰かが小声で『まるで水面を割つて海底を歩くモーゼのようだ』と形容した。私は気分が良かつた。色々あつたがやはりログインして良かつた。これで今日は気分良くなれそうだ。

ストリートファイトのことは明日会社で空き時間にでも椎野君に聞いてみよう。あれだけ振る舞いが違うんだからきっと別人だ。

それにしても性質の悪いいたずらをする奴がいたもんだ。いつか探し出してお仕置きをしてやらねば。捕まえて吐かせれば今日みたいな事をした理由もはつきりする。

これまでにもタウンタスクをクリアしたときなど散々妬み嫉みを受けてきた身だ。なんとなく想像はつく。人生最初のデートの夜に変な疑心暗記に囚われたまま寝るなんてかなりもつたいない。なんとなくすつきりしたしこのまま今日は即爆睡だ。

街の喧騒を背中に聞きながら、私は静かにリーマス世界からフードアウトした。

夜明けとともに容赦無く鳴る田舎まし。若干アルコールが残つて
いるせいか頭も体もだるい。

昨日は色々なことがありすぎた。偶然で片付けるには困難な符合
の数々。ちゃんと出社して椎野君に確認しなきや。リーマスは私が
青春をかけたアイデンティティーのよりどころ。疑問はぜんぶ解明
しなきやすつきりしない。

それに同じ趣味ならゲームの中でもテートできるじやん。現実世
界のスキルよりゲーム内のスキルの方が自慢に値する私。

偽トニーの正体は気になるところだけど多分その他大勢の愉快犯。
なんせ150万人も登録してる有名ゲームだ。変人もアウトローも
大勢いる。私と本物椎野君が組めばあつという間に捕まえて正体解
明できるだろう。

顔を洗いつつ歯を磨き、仕掛けたトーストが焼けるのを聞きながら
服を着替えた。

今日は念のため満充電のネットブックも持つてこいつ。

出社してみると社内の様子が昨日まではまったくがつてている。
所属セクションは慌しい雰囲気に包まれていた。常にどこかで誰か
が大声で呼び合ひ。ダブルクリップで留められた書類が空中を飛び
交つた。

みんなが走り回つていて私もお茶くみじこりじゃない。宇賀さん
とすれ違つたのであわてて呼びとめた。

「なに? 浅倉さん。うちの部署早朝から緊急事態警報発令中なん
だよね。お茶ならまた声かけるから」

「お忙しいのにすいません。何かあつたんですか？」

「トニーだよ。全面戦争中だ。トニーって名札の付いたウイルスソフトでハッキングとは舐めた真似してくれるよ。本社の防衛にてんやわんやで顧客をフォローし切れてない。下手すりや今夜は徹夜だな」

「ちょ、ちょっとトイレ行つてきます」

私は注ごうと持つっていた急須をその場にほつたらかし、家から持つてきたネットブックを掴んでトイレにかけこんだ。

こんな事態だ。だれも私に注意を払うものはいない。個室に鍵をかけるとパソコンを立ち上げ、トニーの項を検索してみた。

!

なんとヒット300万件以上！ 引きこもりのネットゲームっ子だつた私がなぜ今までこんな有名なハッカーについて知らなかつたんだろう。

ゲームばかりやりすぎか？

トニーは新聞やニュースサイトでも連日取り上げられている有名人だつた。フリー百科辞典にもしつかり登録されている。

トニー

出典：フリー百科事典『ジエネペディア（jenepedia）』

トニー（Tony） 、トニー（Tony）

実在の人物

日本の映画俳優、赤木圭一郎のニックネーム。

日本のプロ野球選手、田島俊雄の1996年の登録名（1995年はトニー田島）。

Tony - 日本のイラストレーター。

トニー・カーティス - アメリカの映画俳優。

トニー・グワイン - アメリカの元野球選手。

トニー・ベネット - アメリカの歌手。

トニー・テニール - アメリカの歌手。キャプテン&テ

ニールのボーカリスト。

トニー・スクット - アメリカの映画監督。

トニー・ウイリアムス - アメリカのドラマー。

トニー・ザイラー - オーストリアのスキー選手。

トニー谷 - 日本の喜劇俳優。

トニーたけざき - 日本の漫画家。

トニー・コレット - アメリカの女優。

トニー・オリバー - アメリカの声優、脚本家、プロデューサー、音響監督。

トニー・ホーク - アメリカのスケートボーダー。

⋮

架空の人物

ミュージカルおよび映画『ウエスト・サイド物語』の主人公。本名アンthon・ウイチエック。

トニー・シブリアー - 米国Rockstar Games社のゲームソフト『Grand Theft Auto III』の登場人物であり、同社の『Grand Theft Auto: Liberty City Stories』の主人公。

トニー・アルメイダ - アメリカのテレビドラマ『24』-TWENTY FOUR-の登場人物。

トニー・モンタナ - アル・パチーノ主演の映画『スカーフェイス』の主人公。

⋮

その存在が公式に確認できない人物・その他

ハツカ - トニー・呼称ではカタカナ表記。主に日本企業・日本政府に対する情報攻撃を得意とする。架空人物の欄に分類されているが、何らかの形での実在がほぼ確実視されている有名ハツカ。このページは曖昧さ回避のためのページです。一つの言葉や名前が二つ以上の意味や物に用いられている場合の水先案内のために、異なる用法を一覧にしてあります。お探しの用語に一番近い記事を

選んで下さい。このページへリンクしているページを見つけたら、リンクを適切な項目に張り替えて下さい。

" <http://ja.Jenepedia.org/Jen e/%E3%83%88%E3%83%83%8B%E3%83%BC>"

より作成

カテゴリ：曖昧さ回避 — ヨーロッパの人名

あわてて次のリンクを開く。

トニー ハッカー。

英語名のようだが日本人であると推測されている。

日本BGM株式会社（日本ブロードバンドジェネラルマネージメント株式会社：日本のIT企業）の開発部とその委託元日本国省庁オンラインサイトへ執拗に侵入を繰り返す名物ハッカー。

その目的はいまだ明らかになっておらず、そのため企業も政府も有効な対策を打てずにいる。愉快犯であるという説と何か大きな目的があるという説があるが想像の域を出ていない。

なにこれ？ 日本BGMってこの会社のことじゃないの。
え～と、

トニーは政府の窓枠システム普及プロジェクトと同時期に突然現れ、本プロジェクトの主要受託先である日本BGM社開発部とのハッキングおよびプロテクトのいたちごっこで有名である。必ずなんらかの形で進入が分かる足跡を残すのが特徴。

BGM社は自社のもつ権利関係には厳しいが、他から提供を受けた権利の管理には杜撰な面があることを指摘されており、ネットユーザーからは評判が悪い面がある。

このためトニーの行動は時に英雄視されることがある。

……

記事にさつと田を通すと、私はネットブックを折りたたんでトイレを飛び出した。

何かとこつもない事件に巻き込まれて、まるよつたな氣がする。私の中で瞬く間に大きくなつてくる嫌な予感。彼に会わなきや。椎野君と会つて話しなきや。

廊下の角を曲がりうつしたが大きく膨らんでコースアウトしてしまつた。

顔と胸に大きな衝撃。一瞬呼吸が止まって星が光つた。
相手も同じだつたらしく苦痛にうなる声が私自身の声に重なつて聞こえてくる。

ようやくと見上げると自分が雑務担当している列の女性開発者だつた。

「すいません。あの、私急いで……」

初めて話す相手なのにいつもよりは声が震えていない。

「もう、なんなのよ。廊下は走っちゃダメでしょ」

ハイヒールの似合つやつ手のキャリアウーマン・矢田美奈さんだ。

「派遣の浅倉さんじやないの。どうしたの？ そんな慌てて」

「あの、雑務の椎野君どこにいるかご存知ですか？」

「ああ、椎野くん？ 今日は来てないわよ。始業前に総務に連絡があつたらしくて、今日は別の派遣さんが来てるみたいだけど」

「ええ？ ひょつとして辞めちゃつたとかいうことは無いですね」

「知らないわよ。ははあ、昨日一緒に帰つての見たけど、あんたたち何かあつたんでしょう？」

えー、この人なんで私と椎野君が一緒に帰つてたの知つてるの？
油断ならないな

「何にも無いですよ。食事に行つただけで。昨日はまた明日つて言つて別れたのに…… 聞きたいことがあつたのに困つたなあ」

昨日あれだけ一緒にいたのにケータイ番号やメアドのひとつも聞いてないなんてなんてドジなんだ私は。

「聞いたわよ。浅倉さんネトゲやるんでしょう？ 実は私もやつてん
だけど、今日付き合つてくれない？」

「最強ハッカーが現れてそれどころじゃないんじゃないですか？」

「だれにでも向き不向きや分業つてものがあつてね。たつたいま有
給申請してきたところなの。こんななら朝寝しとけばよかつたな～」

「私と矢田さんが話しているところへ宇賀さんが通りかかった。

「おいミーナ、何やつてる。早く持ち場にもどれ」

「残念でした。たつたいま自由の身になつたとこ」。どうでもいいけ
どあんたなんで私のこと呼び捨てなのよ。階級は同じなんだからね。
チーフマネージャーだからつて偉そうにしないでよね

さすがキャリアウーマン矢田女史。いついかなるときも気高さを
失わない。

「ぐ……」

宇賀さんは何かいいたそうだつたが、言葉を飲み込んでその場を
去つた。

「矢田さん格好良いですね。憧れます」

「あたしは女にはやさしいの。もつと碎けた感じで話してくれてい
いよ。さつき宇賀^{やたミーナ}が呼んだから気づいたかも知れないけど、下の名
前はミーナ。矢田美奈よ。

よろしくね

「こ、こちらこそ、よろしくお願ひします」

「堅い堅い。こちちこそいろいろ教えてもらわないとけないのに
彼女は軽い調子で笑つた。

「なんだつたらタメ口でもいいよ。ミーナつて呼んでね。よろしく、
大魔法使い ミニニ力さん」

それを聞いた私は、心臓を握られたみたいになつて竦んだ。

ミーナさんゲーム内の私を知つてゐる！

「どうして知つてゐんだつて思つたでしょ？ でもま、あのゲーム
の中では結構有名人だしね、あなた」

もし目の前に鏡があれば確認できるだらう。今の私、動搖が顔の

上でダンスしてるはず。

「なんちゃって。オンラインゲーム会社『リーマス』は我が社『日本BGM（日本ブロードバンドジェネラルマネージメント社）』の子会社なの。宇賀君がゲーム内での出来事を知つてたのも管理者に直接問い合わせられるからなのよ。私自身プレイヤーとしては全然大した事無いけど、管理者特権引っ張つてこれるから、連れて歩くと色々役に立つと思うよ」

ミーナはいたずらっぽく微笑み、ウインクした。

「ここまで聞いて私はなぜミーナが私と一緒にログインしようと言い出したのか、その理由を想像した。BGM関係者は昨日今日のリーマス、リアル両方の出来事を関連付けて考え始めているのではないか。おそらく昨夜リーマス内でトニーらしき人物が暴れて私と一悶着起こしたこと、トニーと同じ名前の読みを持つ椎野君が今日突然BGMを欠勤したこと。そしてそれと殆ど同時に今朝から有名ハッカーであるトニーが現れてBGMのシステムに障害を与えていることも。

彼らは私をハッカー＝トニー＝椎野君をおびき出すための餌として利用しようとしてるんじゃないだろうか？

真意は分からぬ。

それでも私は椎野君に会いたい。

彼が犯罪者でもただの派遣社員でも、どっちだつていい。とにかく会いたい。

そして彼の口から真実を聞きたい。

「よろしくお願ひします！」

私はミーナをパートナーに選んだ。

気さくだし、女性にはやさしそうだし。管理者とのつながりもあるから椎野君を探すのにきっと力になってくれる。もし椎野君がトニー・ハッカーだったら…… それはそのとき考えよう。

ミーナと私は顔を見合わせてニッと笑い、それぞれの机に戻つて猛スピードで帰り支度をはじめた。平日の真昼間からログインする

なんて引きこもりやつてたとき以来だ。

リアルの仲間と一緒にもぐるなんてそれこそ生まれて初めてだ。
なんだかわくわくしてきた。一匹狼もいいがやつぱりゲームは仲間がいたほうが楽しい。

私はネットブックを持ったままミーナのマンションにお邪魔することにした。

「ンビニ弁当と炭酸と大量のお菓子を買い込んでいたログイン。
「ミーナ、私トニーに会いたい」
ミーナは目を細めながら私を見て、フフンとわざとらしく微笑んだ。
BGMが私を利用しようとしているな！」はひとつ利用されてやる。

魔法煙を巻き上げて、私たち2人はアロウの街角に降り立つた。道行く人々の数はまだ少なく、何のイベントも行われていないのどかな昼下がり。

ふと横を見るときらびやかな魔法具に彩られた小柄で愛らしい魔法少女が立っていた。

他には誰もいない。

「ふう、こんな時間に来るのは久しぶりだわ。何処から行こうかしら……」

鈴を転がすような可愛らしい声だが話しぶりから誰かはすぐに気が付いた。

「え？ まさか…… ミーナ？」

ちょっと失礼な私の第一声。明らかに声がうわづつている。

「そ、そうよ。誰だと思ったわけ？ ミニカと私2人で入ったのよ。ミーナに決まってるじゃない。ほら」

ミーナはピンク基調で纏めたアクセサリー群をチャラチャラと揺らしながらクルリと一回転してみせた。ミニスカートのフリルがふわりと円形にふくらみ、白いアンダースコートがちらりと見えた。

「キャリアアイドル！ まじかるミーナでーす！！」

それを聞いた私は思わず吹き出しそうになる。

鋭い目つきでボディコンを着こなす矢田美奈からは想像もつかない可愛さ。

リアルでのイメージなど微塵も残っていない。

本人の願望がリアルの外観と180度違う形でこうも目の前にはつきり示されると、とっさにどうリアクション取つて良いか分らな

い。

「バカね。なに啞然としてるのよ。イメージが違うって？ あなた今のお自分の姿を鏡で見たことある？」

そうだった。

長身屈強無敵の魔法使いつて、リアルの私を知ってる人が見たら腰を抜かすほど驚くだろうな。ミーナのギャップどころじゃないんだろう。人つてヴァーチャル世界じゃ本当の願望が出ちゃうんだね。「こんな時間に来たこと無いからどの店が開いてるかもわからんないや。キッドなら間違いないと思うんだけど…… すぐ戻るからミーナここでちょっと待つて」

ミーナは私を残して酒場の方に駆けて行ってしまった。
通行人も少ない炎天下の街角で私は一人やることもなくぽつんと取り残されてしまった。

「はあ…… さて、どうしようかなあ」

つむじ風が砂を巻き上げて目の前の地面に変な模様を作る。

「はあ？！」

足元を見て愕然とした。今吹いているのはつむじ風なんかじゃない。

そこには砂模様ではつきりと文字が描き出されていた。

『ミーナ キテ ウシロノ カベ』

私が見たのを確認したように砂文字はすぐにビュッと焼き消され、後には何も残らなかつた。私は今の文字が誰にも見られていないことを確認しながら後手に壁の位置を探つた。

壁に指が触れるか触れないかのところで誰かに手首をぐいと掴まれ、同時に私の体は壁の中に溶け込むように消えた。

「トー……うぐつ」

思わず叫びそうになる私の口をすぐさま大きい掌が塞ぐ。その身なりは路地裏で対決したときとまったく同じ。

私の心にはそれまでの怒りと憤りがいっきに圧縮され、塞ぐ手すら弾き飛ばす勢いで吐き出された。

「貴様！ よくも、山のようじぶつ殺しやがつて！」

「ま、待つて…… 抑え、て」

「ディノクラウズ！！（暴君の爪痕）」

瞬間私の右腕は禍々しい竜族の鉤爪に変化し、昂ぶつた心はトニーの前腕を容赦なく握りつぶした。

「うひ、がぎつ……」

鋭い鉤爪はすぐに腕の半ばまで達し、トニーはうめき声を上げてそのままの姿勢で固まつた。

すでに皮膚は裂け、橈骨尺骨は共に砕かれて前腕は半ばからぶらりと妙な方向へ曲がつている。辛うじて動脈は繋がつているようだが、千切れそうなほど裂けた傷口からは暗赤色の静脈血が溢れ出している。

トニーは下唇を噛んで冷や汗をかきつつも必死で微笑を作りうと努力している。

おそらくは気が遠くなるほど激痛のはずなのに、今日のトニーはまったく反撃する気配を見せない。

「あの時は」「めんミニカ。もう危害を加える気は無い。殺した連中もプレイヤーの健康に配慮してできるだけ後遺症の少ない過冷却を使つたんだ。信じてくれるかい？」

そう言つトニーの瞳は初めて出会つたときと同じ穏やかな輝きを宿していた。

私はコクリと頷き、彼の前腕に食い込んだ暴竜の縛めをといた。トニーはそれを待つていたかのように治癒の呪文を唱えた。彼の腕がゆっくりと本来あるべき姿を取り戻していく。

「いくつか謝らなきやならないことがある。それとお礼。リアルでは飲みに付き合つてくれてありがとう」

「一つ目の謎はトニー自身の言葉によつてあつさり解かれた。

「あなたは椎野大兄なのね？！」

「「めん。自分で中で気持ちの辻褄を合わせる自信がなくつて……」

今まで言えなかつた

「辻褄なんか合わせなくていいのに。椎野君は思ったことをそのままに言つてくれればよかつただけなのに。なんで消えたのよ?...」

私はやりきれない思いで椎野君を詰つた。声が震える。もう単に人見知りで緊張しているからではない。

私は上目遣いに彼を見つめて下唇を噛んだ。

「さあ喋つてもらいますからね」

そう言う私を見て、椎野君は少し困った目をする。

「ミー力、今日君はミーナと一緒に来たら? ミーナが戻るまでにわつきの場所に君を戻さなきゃならない。手短かに言つよ」

私は頷いた。

「実は僕がこの世界に入ったのは最近じゃない。本当はずつと前からちょくちく来ていたし、その目的も、近い「いちに」のリーマスを完全にぶつ壊すつもりだつたからなんだ.....」

「じゃあ..... 初めて会つたあの日の大爆発も、トニーが?」

トニーは頭を振つた。

「いいや違つ。それに僕自身もリーマス破壊は思いとどまつた。君があんまり熱心だから..... 3年以上前からそつだつたよね、君は」

遠くを見るような彼の目。

「トニー、何を言つてゐるの? 3年前?」

「引きこもりだつた君はこの世界に触れて少しづつ前向きになつていつた。お金を稼ぎ、世界と触れ合うことを覚えていた。僕はそんな君が好きだつたし、この世界の秩序となつてくれる君に感謝していた。誤算だつたのは偶然にも君が、僕より一足先にBGMに入社していたことだ」

「トニー、いえ椎野君。あなたはいつたい..... 何を.....、言つているの?」

「大爆発のあの日、BGMはトニー・ハッカーがリーマスに潜り込んでいることに気付いた。あの大爆発は僕を狙つたBGM開発部が

リーマス管理会社に指示しておこしたものだつたんだ。いわゆるRULER ONLYだ

「リアルの椎野君が、トニー・ハッカー……？」

予想はしていたが実際に知らされると胸が苦しくなる。

「バーチャルでも苦痛の度合いによつては死にいたることもあるのがマルチインターフェイスのすごいところであり、怖いところだ。絶命しなくても精神に異常をきたして社会復帰が困難になるケースも多い。要するにBGMは宿敵トニー・ハッカーをバーチャル・リアル画面において抹殺しようとしたのさ」

達人の域に達している私だからトニーの言い分は尚の事良く分る。タッチスキンインターフェイスは武器バトル、魔法バトル両方の要だ。そのため厚労省や経産省が規制しようとしても、鈍い国産はすぐに戸惑度な並行輸入物に駆逐されてしまい、規制出来ない。また、マニアなら簡単に改造を施してしまう。

「やだ…… そんな、椎野君がトニー・ハッカーだったなんて……」トニーは、駄々をこねる私を無視して続けた。

「爆発は事前に察知してたんだ。そのままほつたらかしにして逃げるつもりだった。ところがその爆心予定地の真ん中でタスクをこなしている知人が居た。

君だ。

僕はそのまま逃げるわけには行かなくなつた。急いで駆けつけ、体力魔力を振り絞つてシェルターを掘つた。爆発直前に僕はたつた今掘つたばかりのシェルターの中に君を引きずり込み、直後僕は力尽きてぶつ倒れた

そこまで言つてトニーは俯いて申し訳無さそうに溜息をついた。

「ごめんね。僕はあの時名乗るべきじゃなかつた。名乗ることによつてより深く君をまきこんでしまつた。BGMの強引なやり方に少しやけつぱになつていたのかもしれない。

爆発の後、君と一緒にアロウに乗り込んで街ごとめちゃくちゃにしてやろうかとも思った。しかし君がこの世界に寄せる思いを考え

ると、僕には引き上げることしか出来なかつた

トニーは、最後だけとても晴れやかな顔で言つた。お詫びはする

が後悔はしていないという表情。

「僕は君に僕のすべてを知つて欲しかつたんだと思う。だから危険を顧みずつい名乗つてしまつた。このゲームをこんなに深く愛してくれる君を僕は愛してしまつた」

あまりにせらうとした告白に私は何が起つたのか一瞬理解できなかつた。

トニーは戸惑う私に優しく微笑んでから、かまわざ続けた。

「もうあまり時間が無い。ミーナが帰つてくる」

「どうすればいいの？ 私、どうすればいいの？」

「どうもしなくていい。ただこのゲームの良き理解者でいて欲しい。このゲームの昔の名前覚えてる？ 3年前、君はそのチーフプロ

グラマーにファンメールを出したよね」

ぴきんと音がして私は思いあたる。彼の言葉が私の埋もれた記憶を掘り当てた。

「『ル……ピナ……？』」

私がそう言うと彼は嬉しそうに微笑んだ。

「そう『ルピナ』。思い出してくれてありがとう」

リーマスがルピナ…… そうだ。当時大人気だつた世界初のフリースタイルオンラインゲーム。そしてルピナのチーフプログラマーが父親と共に起こした会社が今は無き『窓の森株式会社』。私その大ファンで何度もメールを……

「ミニカんとこ、一ヶ月程前にウイルスでパソコンが壊れたり？」

トニーはさらに申し訳なさそうに言つ。

「え？ まだ出会う前の出来事なのに、なんで……」

「あれ僕の仕業なんだ。BGMに仕掛けを打つ前、片つ端から役に立ちそうなデータを関係者のパソコンから漁つてたから。君はそのときすでに開発部に登録されてたみたいだね」

「じゃあ会社に入る前から私のこと知つてたの？ リーマスの『

力だつてことも？」

「ごめん…… でもそれがあつたからファンメールのことも思い出せたんだ。大爆発のときもログを追跡してなんとか君を救うことができた」

「トニー おかしいよ。壊そそうとしたり守るのとしたり、あなたのやつてること全部バラバラ。今日だつて私に頼みたいことがあるから近づいたんじゃないの？」

「そう…… だな、出来れば協力してくれると嬉しいかな」

「大魔法使いミニ力様の力が必要だつてこと？」

勇気を振り絞つてのきわどい質問。もう一度あなたのあの言葉を聞かせて。

「いや、レベルとかゲーム慣れとかじゃなく…… 初めて会つたときから君のこと、あ、いや、実際はずつと前から知つてたわけだけ……」

そこまで言つて口ごもる。しかしあつ伝わつた。この人は大魔法使いミニ力だけじゃなく、浅倉小娘が必要なのだと言つてくれている。

トニー、もう嘘はつかないでね。その笑顔に嘘は無いと言つて。

近づく足音がした。トニーの笑顔が一瞬で強張る。

「急がないと。僕は今このゲームのアクセス権を持つていねい。ヴァーチャルにおいても僕はハッカーなんだ」

トニーは苦笑いした。

「でもミーナは良い人よ。味方になつてくれるかも」

「時間が無い。トニーと別れたくない」

「彼女はBGMの社員だ」

彼の瞳に鉛色の輝きが宿る。

「そこまでだよトニー・ハッカー！」

ミーナの叫ぶ声。同時に轟音。

一人が潜んでいた壁が吹き飛ばされ、周囲が見通せる広場になつ

た。

ミーナは「スロリ調の黒に着替えていた。

シルバーのアクセがじゃらりと揺れている。おびただしい数の魔法具だ。

「お色直しに手間取っちゃってね。真昼間から私の相方をたぶらかすとはいい度胸じゃないの。あなたがトニーね？」

3人がにらみ合つた。

最高レベルを極めた大魔法使い＆創造主でありハッカーである侵入者＆リーマス管理部から特殊能力を授かつた魔法少女。ここにいる3人が正面からぶつかれば本当にこの世界が壊れてしまうかもしれない。

「ゾディアフレイム！」

何の予告も無くミーナが突然辺り一帯に灼熱の炎を立ち上げた。

「レビトラ＆プロテカ！」

私とトニーはほぼ同時に舞い上がり、防御の呪文を張つた。

「何処に行くのミーか？ トニーを連れてきて。逃げたら会社クビよ」

「そんな、ずるい！」

「ずるくないわよ。なにも取つて喰おうってんじゃないんだから」

「トニーが警察に捕まっちゃいます」

「仕方ないでしょ。ハッカーなんてやるからいけないのよ。悪いことは悪いって学校で習わなかつた？」

それを聞いたトニーの頭から何かが弾ける音が聞こえた。

「じゃあBGMは悪くないって言うのか？ ふざけるなつ……！」

途端にトニーの目が溶かした鉄のようにな燃える。

「『イーテュナース！』（喰い荒らされた大地）』

大気が振るえ大地が鳴動した。

周囲数百メートルにわたつて巨大な地割れがいくつも発生し、さくられて牙のように突き出した。もう地面に立つていられる場所はない。

「レビトラー！」

ミーナは間一髪で地面を離れた。

3人は一定の距離を保つて浮かんでいる。

下ではささくれた大地が灼熱の炎に焼かれてゆがんで見える。まるで地獄の釜が口を開けているようだ。

「僕はBGMがやつたことを忘れない。絶対に……」

そう言つとトニーの姿が揺らめいて向こう側が透けて見えた。ログアウトしようとしている。

「まつてトニー！ 私も連れて行つて……！」

急いで追いかけようとする私の肩をミーナが掴んだ。無理やり振り返らされると、ミーナが口パクで私に何かを伝えようとしてくる。

【 オ イ カ ケ ル ナ ニ ガ シ テ ャ レ 】

ミーナがなぜそんなことを言つたのかさっぱり意図が分らなかつた。

どちらにしろ私はトニーについていくことが出来なかつた。

「ちつ、逃げられたか。しばらくは奴も用心してこの世界には入つてこないだろ。私たちもいつたん出るよ、ミニカ」

ミーナは少し白々しい棒読みのような口調でそう言つと、私を肘でつついてログアウトを促した。

【 イ イ カ ラ イ ワ レ タ ト オ リ ニ シ ロ 】

仕方が無いので私は大人しく従い、ミーナと共にログアウトした。

リアル社会の高層マンションの一室。ミーナの部屋から見える空は快晴。おもてでは、こつもの日常が淡々と繰り広げられている。そう長い時間ログインしていたわけでもないのに物凄く疲れた。トニーの大魔法が飛び出してリーマスのアロウ周辺はかなりめちゃめちゃになってしまった。

「魔法の跡は管理部が修復しどくはずだから気にしなくていいからね。あー、おなか減った」

ミーナはマルチインターフェイスを外し、パソコンから離れて、置いてあつた買い物袋から食べ物をあさっている。

私もネットブックを閉じて、自分の買い物袋を取り出した。

「トニーと一緒に行けなかつた。彼また一人ぼっちに……」
やつと分かり合えそつだと思つたらまたすぐ離れ離れ。涙が滲んできそうになる。

「バツカねえ。めそめそしないの。あたしに任せときな。あ、緑茶がいい?」「一ヒーがいい?」

ミーナは弁当をレンジに突つ込んでタイマーをひねると、ペットボトルを両手に持つて聞いてきた。

「りょ、緑茶……」

こんな精神状態でお皿ご飯が喉を通るだらうか。私はビニールパックされたおむすびを握り締めてトニーのことを考える。
「どこが最強最高の大魔法使いよ。トニーを止める」とも救つ」とも出来ないくせに……」

後悔が私の心に張り付いてくる。

「あんたがいたからトニーは自分から逃げ出したのよ。わたしとト

「一騎打ちなら彼簡単に私を殺してたわ。リーマスだって崩壊させて世界自体がなくなつてたかもね。彼は逃げることであんたとあんたの愛する世界を守つたのよ。おにぎり温めよつか？」

「いいです。まだ喉を通りそうに無いから。チョコチップもりつていいですか？」

「そつちは喰うんかい？！ 心配しなくてもトニーはどうせまた戻つてくるよ」

「どうして分るんですか？」

私はチョコチップクッキーを摘みながら聞いた。

「女の勘さね。今回だつてトニーはあんたがログインしていくのを待つてたんだと思う」

私は緑茶を注ぎながらほっぺたを膨らませてミーナへの不信感を表現した。

まったくミーナは味方なのか敵なのかわざり分らない。

「とにかくトニーは戻つてくる。それまでにこっちの方針を固めとかないと、また今回みたいなことになるからね」

ミーナはキャリアウーマンらしく新製品の満漢全席弁当3500円を頬張りながら言つた。コンビニには似つかわしくない超豪華弁当だ。

「あのときビビッとしてトニーを逃がせつて指示したの？ しかも口パクで」

「さあ何ででしょ。あんたを人質に取つてトニーを引き止めることも出来たんだろうけどね」

ミーナがずる賢そくに口角を吊り上げて笑つてみせる。

「もう、まじめに答えてよ」

私はチョコチップクッキーをザラザラと口に流し込んだ。

「魔法使いミーナは、あの時ずっと管理部にモニタリングされてたんだよね。おしゃべりの内容から見たもの聞いたことまでぜんぶ、本部に筒抜けだったの」

「あ、……」

そうだったのか。だから口パクで。

「でも、だつたらなんで？」

「あたしは BGM の社員だしリーマス管理部を通じてあんた達の調査を命じられてるわけだけど、個人的には BGM が過去にやつてきたことにも興味があつたんだ。それでまあ色々と嗅ぎまわってみたわけ。あーもうおなかいっぱい」

弁当の空き箱をゴミ箱に突っ込むとミーナはキッチンに立ち、ホットコーヒーを煎れ始めた。ホットパンツにTシャツのミーナは普段会社で見る矢田美奈さんとは一味違う。キャラクターマン風のスタイルも素敵だけどカジュアルなものまた別のかつこよさがある。

「リーマスは BGM の子会社である『株式会社リーマス』が運営管理するオンラインゲームだけど、もともとは違う会社で作られたゲームなの」

サイフォンが「ごぼごぼ」と音を立てている間、ミーナは今日一番真剣な表情になつた。それがまたカジュアルな外観とのミスマッチで一層かっこいい。

「リーマスは当時もつとも優れていると言われた基本ソフト『窓枠システム』をインターフェイスとして稼動している。『窓枠システム』が採用されるまでの基本ソフトは、それぞれが決まつたコマンドを通じてしかパソコンに命令できないものだつた。だからとても素人に使いこなせるものではなかつたの。窓枠システムは個々のパソコンからの入力を飛躍的に簡単にし、ネットゲームのみならず、あらゆる世界にパソコン利用を広めていったわ。まさに画期的な発明だつたわけね」

私もパソコン黎明期の大発明と黒い噂については聞いたことがある。

公正に評価されるべき発明特許の権利が巨大組織によつて糞ろにされ、国家レベルで横取りされたというものだ。

ことの真偽は定かではないが、国は当時できるだけ低コストで成長産業を育てたかった。だから、その当時もつとも優秀だつた基本

ソフトの権利料を徹底的に安く買い叩こうとして、わざわざ特許法を改悪した。そして、ある中小企業の発明特許を政府とつながりの強い大企業にその権利があると偽り、取り上げてしまつたというのだ。もともと資本の無い、アイデアだけで伸びようとしていたその中小企業は成長の芽を摘まれてまもなく潰れ、社長家族は一家離散の憂き目にあつたと言われている。私が知つてることを断片的に述べるとこの程度だ。

ミーナは「そこまで知つてはいるなら話は早い」と、私にもコーヒーを注ぎながら続けた。

「当時、窓枠システムを発明したのは『窓の森株式会社』という中小企業だつたの。窓枠システムはどんなアプリケーションとも相性がいい便利なソフトで、今ではあらゆる機器に最初から組み込まれているのはミニカも良く知つてゐるわよね」

ミーナが言うとおり。

現在販売されているほとんどすべてのパソコンに窓枠システムは不可欠なものとして組み込まれている。一部マニアックなファンだけが『りんごの森』や『ライナス』といったマイナーな別のシステムを使つてゐるのみだ。

「本来は何にでも使える便利なシステムだけど、その窓枠システムを初めて実用化したのが当時窓の森株式会社の運営していたオンラインゲーム『ルピナ』よ」

つながつた。ここでやつと。

すつかり忘れていたが、私がまだ何の取り得も無いただの引きこもり中学生だつたころ、初めて『ルピナ』をやつたときの感動は、それはもう素晴らしいものだつた。

ヴァーチャルとはい、マルチインターフェイスを初めて採用したそのリアル感は他の追随許さず、また、努力し、それが認められ、糧を得て、稼いだギルで新しい道具を買い、さらにまた己を高めていくといった成長過程のゲームバランスは群を抜いた秀逸さで、リアルの自分自身に希望を失つていた当時の私は、どんどん『ルピナ』

にのめりこんでいった。

しかし、引きこもりだった当時の私には感動を分かち合つ友人も熱心につたえたい恋人もいなかつた。だから私は当時の開発者にファンメールを書いた。溢れ出る感動を誰かに伝えずにはいられなかつたから。そしてこれは後で知つたのだが、驚くべきことにその開発者は当時の自分と同じ中学生だつたのだ。もしこの事實をその當時知つていたなら、私はなおさらルピナの熱狂的なファンになつていたことだろう。

その後、ゲーム 자체はずっと続けていたのだが、いつの間にかゲーム名はルピナから『リーマス』に代わり、いつの間にか運営管理会社も代わつていた。

しかし当時の私は、自分自身のレベル上げに精一杯でそんなことはまったく気付いていなかつた。いつのまにかゲーム名も、あたかも最初から『リーマス』であつたかのような気がしていただ。

しかし私たちファン層がのん気にゲームを楽しんでいるその裏側で、ゲームと基本ソフトの権利をめぐつて血で血を洗つよつな争いがあつたのだ。その事実は、どうやら疑いようが無い。

ミーナは「コーヒーを飲み干し、日差しの強い窓際に腰掛けて窓からまぶしそうに外を眺めている。私は部屋の奥でふかふかのカーペットの上に女の子座りをして飲みかけのコーヒーカップを両手で握り締めた。

「とにかく政府は基本ソフトの権利関係コストを安く抑えたかつた。だから当時の日本には無かつたサブマリン特許という概念を無理やり取り入れて特許法を改悪した」

「サブマリン特許……？」

「そもそも日本は先願制といつて先に特許省に届けた者が発明の権利を得る制度を取つてゐるのよ。しかしあメリカなどでは先発明主義と言つて先に考えたことの証拠を示せれば出願が後でも特許権を主張できる。当時の政府は産業振興の費用を節約するために先発明主義を取り入れた特許法改悪を時限立法で行つた。

そして、過去に日本BGMが窓枠システムに似たものを作ったと言つたセの証拠を日本BGM自身にでつち上げさせた。それを見た特許省は、窓枠システムの権利を窓の森株式会社から取り上げ、日本BGMのものだと認めてしまったのよ

「そうしておいて政府自身はその窓枠システムの使用権を日本BGMから安く買い叩いたつてわけね。不正に与した日本BGMは政府

の提示する条件が非常識な安価でも文句を言わないし、ましてや日本BGMが自分から真相を語ることは絶対に無い。日本政府は不景気を脱出するエンジンと燃料を格安で手に入れだと

「その通りよ。改悪特許法は時限立法だったから、今は以前の法文に戻っているわ。単に、特定の権利関係をいじりたかつたから行つただけの、とんでもない改悪だつたわけね

すべてを聞き終えた私はなんとも言えない索漠とした気持ちになつた。

あのすばらしいゲーム世界を構築する一方で不当な弾圧と戦い、敗れて一家離散に追い込まれたトニー。そしてその世界を一度は壊そつと決心し、しかし私のためにあえて残すと言つてくれたトニー。

「自分が過去に一所懸命作つたゲーム世界を彼は『腐つていい』『だから壊す』と言つたの。彼が作つた、私が大好きな世界なのに。それを聞いて、私すごく悲しかつた。悲しくてたまらなかつた。『『なんでそんなこと言つの?』って思わず叫んでた

「どうか。じゃあそれがミー力の本当の気持ちなのさ」

「私ね、トニーが与えてくれた世界のおかげで今こうしていられるの。本当に冗談でも大げさでもなく。あのままなら私、いつ死んでもおかしくなかつた。自分自身の人生観や生きがいの殆どを彼と彼の世界から貰つていたことに気付いたの

「みんな一度はぐぐるんだあよ。ありふれた出来事さ。でも、今のあんたにや 宝物かもね」

ミーナの声は、おどけてはいたが優しさと思いやりに溢れている。
「ひ……、『めん、あんまり見ないでミーナ、…… 今の私、変な顔だ」

いつのまにか涙が溢れていた。

「変じやないよ…… 全然」

「自分が作った世界を壊そうと決心した時、トニー自身とでも辛かつたんだろうなって、想像したら勝手に泣けてきちゃった……」

声が震える。

引きこもり時代の私は孤独だったけど、トニーはもっともっと孤独で心細い戦いを続けてきたのだろう。壊そうとしたり守ろうとしたり、殺そうとしたり愛してみると書いてみたり、彼自身も大きく揺れている。

私が愛した世界は彼自身だ。彼が壊そうとした世界は彼自身だ。彼は自分の世界を壊すことで自殺しようとしていたのだ。でも彼は言つてくれた。『壊すのは止めた』と。前向きに生きると書いてくれたのだ。

手強く知的で大胆で、謎めいて復讐に燃えて危うく逃げ回る、不遇の天才。

孤独な天才は、壊そうとしたその世界を『君のために残す』と言つてくれた。

あのさらりとした告白に込められた想い。

彼は心から私を必要としてくれている。

「ミーナ…… わたし…… 私、もう会社をクビになつてもいい…… 私トニーと共に生きる。彼がハッカーだつていいの。わたし……」

「……」

涙と鼻水が止められない。

私は椎野君に初めて出会つたときから、既に惹かれていた。

いいえ。

それ以前から、トニーがハッカーになる遙か前から、私はおそらく彼に恋していた。

初めてファンメールを送ったときから、今日のこの運命はもう決まっていたのだ。

ルピナに出会う前の私は、ただの生ける屍だった。

友達も、恋人も、生きがいも、何も無かつた。

トニーだけが私に全部をくれた。そして愛していると、必要だと言つてくれた。

いまならはつきり言える。私は彼のための魔法使いだ。力になりたい。今すぐトニーの力に。

「バカね。焦らないでよ」

落ち着いた口調でミーナは2杯目のコーヒーを勧めてきた。

「でも、私……」

持ってきたハンドタオルで顔を拭いながら、私はコーヒーを受け取つた。

「別に会社に告げ口したりしないわよ

「ほんとに?」

「当然でしょ。それくらいヤバい話なのよこれ。告げ口なんかしたら、秘密を知つた者と思われて、あたし自身もBGMから田を付けられちゃうわよ」

「信じていいのね?」

「何のためにいつたんログアウトしてきただと思つての?」

ここにきて、やつと私は心の底からホツとした。

BGMの正社員であるミーナが味方になってくれるならこれほど心強いことはない。

「さつき言つたことが本当なら、あたし自身もBGMを許せない。

それだけよ

「でもミーナはBGMが潰れてもいいの?」

「ふつ、あつはつはつは、あんたなにそれ? マジで言つてるので?」

「な、なんで笑うのよ?」

「なんでって、腐つても天下の日本BGMよ。そんなことへりこで

潰れるわけないでしょ

「ほんとに？」

「そりや社会的に相当なダメージは受けれるわよ。不買運動や役員総入れ替えが起こるかも知れない。あちこちの公共的入札から外されたり、企業収益は一時的にかなり落ち込むかもしないわね」

「それでも大丈夫なの？」

「全然大丈夫。逆に、謹を出し切つて将来的には今より評価が上がるかもしないわ。

いえ、きっとそうなる。こういう怪しげな部分は、BGMのほんの一部なのよ。うちの会社の隠れたボテンシャルは凄いんだから「あれだけ暗かった話がミーナにかかるとこんなに明るく、楽しげに展開していく。

本当に前向きな女性。ミーナは根っからのキャリアウーマンなんだ。

「ミーナにはまだ言つてなかつたけど、あたし自身にも捨て置けない理由があるんだよねこの一件」
さつきまで明るかつたミーナの表情に少しだけ影が差した。

時刻はまだ昼下がり。

オンライン上にネットゲーマーが増えてくるのこはまだしばらく時間があつた。

私とミーナは、その後少し仮眠を取った。夕方になると外に出かけて、勝屋と一緒に牛丼を食べた。このころになると私とミーナはすっかり意気投合していた。私達は、牛丼を食べながらこれからのプランを話し合った。

夜になればキッドの代わりにガウが酒場にやつてくる。ノンプレーヤーキャラのキッドと違つてガウからならもつと色々な情報を聞き出すことができる。

ガウはその日にあつた最新の情報をだれよりも幅広く閲覧する権利を持っている。

ミーナは『トニーは、絶対にもう一度リーマスに戻つてくる』と言つた。

私もミーナと同じ意見だつた。

トニーはリーマスの元々の開発者だ。それにハッキングには絶対の自信を持っている。

少々危険な目にあつても手を変え品を変えなんらかの方法で再び進入してくるだろう。

ミーナは、トニーがやつてくる理由の一つに私の存在も付け足した。

私がリーマスに入りしている限り、必ずトニーはやつてくると言つのだ。

私もそう信じたかったが、そこまでの確信は無い。しかし逆なら言える。

再びトニーが現れるまで私はリーマスを続けよう。もともとゲーム中毒なのでやめられるわけはないのだが。私にはその責任がある

と思った。

彼は私のためにこの世界を残すと言つてくれた。
つまり私がリーマスをやりつづけることが、彼の期待に応えると
いうことなのだ。

再びミーナの部屋に戻ってきて、リーマスに潜ることにした。
時刻はもつともアクセスが増える夜11時過ぎ。

ミーナは書斎のデスクトップの前に座り、私は持ってきたネット
ブックを開いて電源を入れた。私達二人は上級者用高感度マルチイ
ンターフェイスの調子を確認した後、再びアロウの街外れに舞い降
りた。

ミーナはピンクのフリルスカートと膨らんだ袖の魔女っ子風の衣
装に先端が回つてキラキラ光るステッキを持っていた。

私は、今日一日でミーナのネット衣装を3着も拝見することにな
つた。

そのどれもが小さい女の子の憧れを絵に描いたような可愛さだ。

一方、私はすらりとした長身とその背中に大剣ワルギス。加えて
黒のシックなマントを羽織つている。オンラインヴィジョンだけ見
ると私とミーナどっちが年上だかわかりやしない。無いものねだり
といつのか、どちらもそれぞれの願望がもろに出たルックスだ。

「まずガウに会つて情報を仕入れる」

ミーナが私を促した。私も同意した。

「どけどどけ！ ザラク様のお通りだ。道を開けろ！」

ただでさえアクセスの多い時間帯。アロウのメインストリートは
昼間とは違い、相当混雑している。その人ごみを搔き分けるように
して、際どいビキニを着た大勢の美女に担がれた神輿がやってきた。
神輿には、宝塚スターの男役をそのまま持ってきたような耽美な
キャラが乗っている。

斜めに座つた輿には御簾がかかり、その御簾を搔き揚げる手には

数々の宝石が光っている。立てた襟には金銀の刺繡が光り、大きめに巻いた縦ロールの髪が豊かに神輿のリズムに乗って揺れていた。

「なんなのミーナ、あの塚趣味丸出しの奴」

「そうねえ、簡単に言えば私達の上役でライバルってどこかしら」

先頭で露払いの役割を果たしているのは、細面の黒尽くめで全身に数百本の刃を装備した男。過去に私はこの黒尽くめ刀物男の顔を見たことがある。それもゲーム内ではなく日本BGMの社内で。

「ミーナ。私、あの先頭の男の顔、会社で見たことある」

「鎌切の奴、止めとけばいいのに素顔で入ってくるんだもんな。あいつの本名は鎌切^{かまきり}郎太^{ろうた}。ハンドルネームもそのまんまでカマキリローター。いくらなんでもまずいだろ素顔は。だから普段は会社の指示で、ゲーム内では覆面してるんだ。おそらく今日はトニーをおびき出す目的で、いつもと逆の指示が出てるんだ。覆面を外しておけって」

カマキリローターは私達を見つけると、露払いを先頭のビキニに任せっこりに近づいてきた。田からは蔑みと惡意がほとばしっている。

私は初めて見たときからこいつが嫌いだつた。蛇とカマキリのいいの子がもし生まれるならこいつみたいな顔になるんだろうな。

「よつミーナ、調子はどうだ？」

ミーナはカマキリには返事もせずにそっぽを向いた。

「おめえ、それが上司に向かつて取る態度かあ？ ああんつ？」

「次長なんだよあい」

ミーナは私のほうに向いて、ぼそつとつぶやいた。

「おめえが昼間へマやつたから楽座部長や俺が出張つてくる羽田になつたんだろうが。詫びのひとつも言えねえのか？ なつてねえぞ、こら」

「どうもすいませんでした」

ミーナは、誰が見ても心が籠つてないと一目で分かる態度で、カマキリにお詫びを言った。

「けつ」

カマキリは吐き捨てるように言つて、踵を反して神輿の方へ戻つていつた。

「神輿に乗つてゐるのが樂座文男らくざぶみお。ハンドルはザラク。日本BGMの部長で私達の上司よ。ミニカはまだ本物を見たこと無いでしょ？」

見たら引くわよ～」

ミーナはそこまで言つと自分から神輿に近づいていつた。

「お疲れ様です、樂座部長。脇間はハッカーとおぼしき者を捕り逃して申し訳ありませんでした。ここにいるミニカと午後休憩を頂きまして、先ほど再びログインしてまいりました。お邪魔にならないよう働きますのでよろしくお願ひします」

「なんだ、ミーナ君か。そのまま休んでいても良かつたのに。トニーとやらも運が無い。私が出張ってきたからにはただでは済まんよ、フフフ」

縦ロール塚男は、神輿の柱に活けてあるバラの花を一輪抜くと鼻に軽く擦る仕草をした。

同時に甲高い口笛が鳴り、周囲のビキー軍団から黄色い歓声が次々に上がった。

どうやら縦ロールが花を持つたら口笛と歓声を出すのはお約束になつてゐるらしい。

「トニーはこのゲームの創造主で天下無敵のハッカーです。ゆめゆめ油断なされませんよう、お気をつけください」

ミーナはわざと懲懃に振舞つてゐるようだ。

部長はそういうバカ丁寧な扱いを喜ぶらしい。

部長に頭を下げたミーナは、ミニカの方をチラツと見てピロツと舌を出した。

カマキリは喝を入れるように周囲に言つた。

「確かにトニーは強敵だ。今後、ハゲしい戦いが予想される。てめえら気合入れてけ」

それを聞いたザラクは突然いきり立つた。

「ハゲしい？ ハゲがハゲしいだとお？」

「いえ、そうではありませんザラク様。ハゲしい戦いが予想される」と……」

「まあたハゲと言つたなあ？ ハゲと」

「あ！ いえ、すいません。お許しください」

「バカモン！ 許せるか！ そこへなおれ。だれかこいつに舌叩きを浴びせろ」

「すいません！ 以後、氣をつけます。お許しを」

「以後、毛が尽きますだと？！ もう許さん！ 一三百回だ」

私は、縦ロール男がハゲにこだわるのがおかしくて、迂闊にも吹き出しそうになつた。

あぶないあぶない。

私とミーナは少しずつ後ずさりしてこつそりその場を立ち去つた。
「あ～、おかしかつた。部長のリアル、なんか想像ついたあ～。もう笑い堪えるので大変」

角を曲がつたところで、私は堰を切つたように笑い出した。

「部長つて、リアルじゅぜんぜんもてないキヤラなの。神輿を担いだ美女軍団は妄想と願望の究極形ね」

酒場への道々、私とミーナは部長とカマキリの話題で盛り上がつた。

トリッショウの酒場にはすでにガウが来ていた。

ガウは私達の方を見るとギョッとしてあからさまに目を逸らした。いつも気さくに話しあってくれるのに奇妙なこともあつたもんだ。体をすくませるような仕草も見せたが、その超巨体をいつたいどこに隠そうといふのか。

カウンターに近づくと小柄なミーナが急に大股になつてガウに歩み寄つた。

「なんで部長やカマキリがここに来てるのよ？ あんた、もつと早めに教えなさいよ。

いきなりでびっくりしたじゃない！！」

巨人はミーナに叱責されてますます萎縮したようだつた。

「ちょ、まつてまつてまつて……俺も今さっき来たんだよ」

「なら会社からメールくれれば良かつたんじゃないの。プロジェクト開発部のプロジェクトリーダーが直属の上司のログイン聞かされてないわけ無いでしょ。どうなの？ え？」

「分かった分かった分かった。知つてました知つてましたよ。ミーナに連絡しなかつたのはうつかり忘れていたからです。ごめんなさい」

「素直に謝るならいいのよ。この次からはもつとしつかり頼むわよ」ピンクフリルの小柄な魔法少女が、ギガント族も真っ青の巨人を恫喝している。

こんなシーンはなかなか見ることが出来ない。今日は貴重なものが見られて良かつた。

でもこの二人、いま会社のこと話してなかつた？

「ミニカ、紹介するわ。私の元夫でプロテクト開発部のプロジェクトリーダー・宇賀才人こと酒場トリックショウのバー・テン兼情報屋ガウよ」

「えへ、宇賀さん？ リアルと全然イメージ違う！」

「浅倉さん、それは言いつこ無しだよ。この中で一人でもリアルのイメージそのままなキャラ使つてる奴いるかい？ みんな無いものねだりな設定になつてるんだよ」

「そ、そうですね。言われてみれば」

「どういうわけか力マキリだけはリアルでもヴァーチャルでもまったく同じだけね」

ミニカがすぐに気づいたよ。会社で見たつて

「あの人は特殊だよ。むしろ本物の蠍螂のコスプレでもやつといて欲しいくらいだ。

いくらなんでも素顔は無いだろ？」

「宇賀さんは、いつから私がリーマスの『ミニカ』だつてことに氣

づいてたんですか？」

「会社で聞いてからだよ。ミニ一力とは長い付き合いだけど、それまではほんとに気づかなかつたんだ」

「ひどいなあ。気づいた時点で教えてくれれば良いのに。恥ずかしい」

私は、自分の顔が紅くなるのを温度で感じた。だめだ、自分自身にかけていた魔法が切れた。声が震えそう。がんばれ私！

「俺はもともと趣味だつたんだこのゲーム。今は会社に協力させら
れてるけど。だから『大魔法使いミニ一力』とガウとの間の友情は本
物さ」

ガウは巨大な瞳でウインクしてくれた。私はガウの言葉が嬉しく
て胸が少しキュッてなつた。

「ありがとう。でも宇賀さん意外だつたでしょ？ 私みたいなのが
リーマスのミニ一力で」

「『大魔法使いミニ一力』の正体は子猫ちゃんでしたってか？」
ミニ一力が冷やかす。

「魔法少女の正体がキャリアウーマンだつたつーのよりは夢があ
ると思うけどな」

「あんたそれ誰に向かつて言つてるの？」

ミニ一力は、かわいいピンクフリルの外観とは似ても似つかない強
引で強気な性格を遺憾無く發揮して言い返す。

「ひいい、ごめんなさい。しかしお前、そのキャラでいるときくら
いかわい娘ふりつ子してくれないかな？」

巨人が萎縮するところは何度見ても違和感いっぱいでおかしい。
「ほつ」といて。これは個人的趣味であつて、男を喜ばすためにやつ
てるんじゃないの」

「おー一人は、もともと夫婦だつたんですね」

「見りや分かるだらうけど、俺からの一方的な性格の不一致つてや
つね」

「あんたに言われたくないよ。意気地無し」

「だから俺は戦闘から離れて情報屋やってるじゃないか」

「そこまでしてネトゲやりたいかね」

「それこそほつといてくれよ。これが俺の自然体なんですよ
元夫婦の夫婦漫才はいつまで見ていても飽きなかつた。」

「ザラクとカマキリローターが出てきたつてことは、いよいよ本社
がトニー対策に本腰を入れてきたつてことだ。聞いて驚け」
ガウは真剣な顔になつて言つた。

「さつさと言いなさいよ」

「なんとリーマス管理部は、俺に一億ギルのタスクを発表しろと命
令してきた。普通のタウンタスクよりもはるかに高額な史上最高額
だ。しかも参加費は無料」

「そ、想像ついちゃつた。それつてひょつとして……」

いやな予感が最高潮に達する。これはもう間違ひ無い。

「そ、トニーの指名手配だ。しかも生きている必要は無い。さら
には有効な情報を俺や部長にもたらしただけで特別ボーナスもつく
「あんたそれに乗るつもりじゃないでしうね？」

「おれはBGMの社員でプロテクト開発部のプロジェクトリーダー
なんだぞ。トニー・ハッカーは会社の敵だ」

「あんたねえ。BGMが過去にどんなことやつてきたか知らないつ
ていうの？ 過去に窓枠システムの買取交渉をやつて国と一緒に契
約金踏み倒したのはBGMの方なのよ。あんたそのときの折衝人の
一人だつたでしょ？」

「バカ、声がでけえよ。あのときはまさか会社が契約金踏み倒すな
んて思いもよらなかつたんだ。しかも法改正までやつて合法的にな
「あの時、天下つてきた役人は取締役におさまつて今でものうのう
としてるのよ」

「ええ、ほんとなんですか？ トニーの家は一家離散状態なのに、
ひどい……」

「王座取締役のことだろ？ 今でも古巣の経産省にせつせと内部情報リークしてるらしいぜ」

「最悪だなクズ野郎。それでもガウはそんな奴らのためにミーーを賞金首にしちゃうって言うの？」

ミーーがガウに詰問した。こいつときは本当に頼りになる。ミーーが味方についていてくれて良かった。

「おいおいたのむよミーー。何度も言つが俺はプロテクト開発部のプロジェクトリーダーなんだ。どうやつたってハッカーとはお友達にはなれない。ガウとしても、宇賀としても、管理部の言つ通りにしないと俺がクビになっちゃうよ」

「なればいいじゃないの。だいたい自分のやつてることが恥ずかしくないの？」

「無茶言つなよ」

ガウは巨体を揺らして泣きそうな顔でミーーを見た。

「待つてミーー。責めたら可哀想だよ。今は少しでもいいから協力してもらつことを考えなきや。ガウの立場だからやつてもらえることもあると思うんだ。私とガウ 親友だよね？」

「ミーーか、それってどう言う意味？」

ガウは目尻を下げた顔で聞いた。

「言つた通りの意味よ」

私は数年来の友人に大魔法使いミーーかとして微笑んだ。

「だつてさ、ガウ。大魔法使いミーーかのたつての頼みだつてよ。どうする？」

「ガウ、お願い。こつそり協力してくれるだけでいいの」

「こつことは王座取締役の耳にも入つてるし、部長が出張つてきているし。賞金首トニーのタスクはもう撤回できないぜ」

「仕方ないわ。それでいいの。そのかわりこつちに有利な情報回してね」

「絶対秘密にしてくれよ。最愛の趣味と天職の両方を同時に失うかもしれないんだから」

「あたしだってミニカだってそのくらいのリスクは犯してるわ。頼りにしてるわよ」

真夜中のリーマス全土に緊急告知のサイレンが鳴り響いた。

今現在から一週間、全コーナーのディスプレイの角にトニーのアバターがWANTEDの文字と共に表示される。

ついにスタートの号令が鳴ってしまった。もうだれも止めることはできない。

それからわずか1時間ほどで、アロウの周辺は全リーマス世界から駆けつけたハンター達でごったがえした。

ならず者から伝説の騎士までアロウに集まつた兵は総勢30万人。実に全リーマスコーナーの5分の1がこの街に集まつたのだ。さながら街はオンシーズンの観光地か通勤電車の中のような混み具合になつていた。

言つまでも無く、今回のは史上最高のタスク報酬。

どの参加者にとつても2度とは無い最大のチャンスだ。

アロウの中でも特にトリッッシュの酒場はかつて無い混雑に沸いていた。

「久しぶりだな、調子はどうだ? ミニカ」

不意に背後から野太い声が私を振り向かせた。昔、長期タスクを解くのに共にパーティを組んだことのあるデメドラーが声をかけてきたのだ。

「ああ、久しぶりじゃないの。元気してた?」

デメドラーのすぐ横には翻訳ソフトが立ち上つてウインドーには中国語が表示されている。彼はチャイニーズなのだ。

酒場に集まつたキャラの周りには様々なアプリケーションが立ち上つてゐる。

その多くが翻訳ソフト。対応言語の多様さがこのゲームの裾野の広さを物語る。

ハングル、イングリッシュ、チャイニーズ、フレンチ、ジャーマニー、ラッシュ……。

集まつたならず者のうち、半数以上がなんらかの翻訳ソフトを立ち上げてゐる。

そういえば『ルピナ』時代からそうだった。トニーの紡ぎ出したエンター テイメント性は当時から万国共通の魅力を持っていた。やはり彼は天才なのだ。

気がつくと周囲には知つた顔が大勢うろついていた。

普段南サンドラでタスクをこなしている『メドラー、ダウト ラル、ゲムネマ。

西部で天然資源を発掘している『ディグゾー。

北方で幻獣狩りをやつて いる『エスキムとビガーフット。

そしてアロウの郊外でルール違反者のバウンティハンターを専門にやつている『ヘルガンとベクティム。

いけ好かない奴も中にはいるが、どいつもこいつも腕は確か。一筋縄ではいかない凄腕ぞろいだ。まあ大魔法使いミニアカほどじゃなければいけどね。

「あんたたちまだ生きてたんだね。こんなとこりまで出張つてくるなんて、相変わらず御盛んだこと」

「あつたりめーよ。一億のタスクだぞ。10年に一回あるかどうかだ」

「まったくだ。タウンタスクの報酬より高額なんてありえねえよ」

一人一人が自分こそタスククリアすると思つて いる。相変わらず威勢の良い奴らだ。

ああ、この雰囲気に包まれて いる感じ。冒険に出る直前の緊張感。

リアルの浅倉小娘を知らない昔の仲間達と話しているときだけ、私は真に大魔法使いミニ力に戻れる。自分の心に暗示の魔法がかかっていくのが分かる。

世界を足下に見下ろす恍惚感。

ダウトラル、ゲムネマ、ディグゾーの3人が立て続けに私に声をかけに来てくれた。

それぞれのホームグラウンドではひとかどのハンター達が、ここではみんなミニ力に一目置いてくれる。以前の私ならこのビッグタスクをこなすため、昔の仲間達と一緒に喜んで旅に出るのに。こいつらと一緒に戦いたい。お互いに助け、称え合いたい。

なのに、なんて悲しいんだ。このタスクのターゲットがトニーじゃなければ。

ちくしょう！ 管理部とBGMの奴らめ。私の大事な魔法世界を侮辱しやがつて。

ここに集まつた奴ら全員にトニーが無実だつてばらしたい。でも、喋つたらどうなる？

敵は今この世界のルールに則つた戦いを仕掛けている。それならこちらも正攻法で迎え撃つべきだ。それでこそ私のこれまでの経験が生かされる。トニーは私に、この世界を守ると誓つてくれたのだから。

ドヘルガンとベクティムが丸テーブルの周りに人を集め、パーティメンバーを募り始めた。やつらはこういう駆け引きに慣れている。分け前の説明もそこそこに、いきなりフォーメーションの組み立てに入っているようだ。

こいつらは、雑魚をいくら組み合わせてもトニーにはかなわないって事を分かつてない。しかし、だからといってこのまま放つておくわけにもいかない。

私は天を指差し、声を張り上げた。

「私もパーティを募る。ドヘルガンのところよりも報酬をはずむぞ！ どうだみんな」

みんなの視線がいっせいに私の人差し指を見上げた。とにかくできるだけ時間を稼がなければ。

ドヘルガンとベクティムは、私の言葉を聞いてあからさまに嫌そな顔をした。

そして辺りに響くわざとらしく舌打ちをして、こちらに文句をつけてきた。

「おいおいミーか、そんなこと言つて大丈夫なのか？ 人数制限もせずに募つたらいくら一億のタスクでも儲けは吹っ飛んじまうぜ」「いいんだよ。こちとらできるだけ手間を省きたいんでね」

「一匹狼のお前らしくないんじやないのか？ そっちの魔法少女ちやんもびっくりしてるぜ」ドヘルガンが節くれだつた指でミーナの華奢な顎をなで上げた。

「気安く触るんじゃないよ。雑魚虫どもが……」

ミーナの見た目からは想像できない荒っぽい啖呵が飛んだ。

予想外のリアクションにドヘルガンとベクティムは一瞬呆然とした。

「余計なお世話なんだよ。あたしはすべてミーかに任せてるんだ。端からじちやじちやいつてんじやねえ」

おいおいミーナ、言い過ぎだつて。不必要に刺激してどうする。「と、とにかくいくらで雇おうが私の勝手だろ。あんたらにしひべ言われる筋合は無い。それは確かだ。私はこの世界じゃあもう十分ナンバーワンだ。今はスピードクリアにチャレンジしたい気分なのさ」

その場をじまかすために、私は思つてもいない適当な動機を口走つた。

ただでさえ高額タスクでみんな殺氣立つてゐるのに、これ以上刺激する必要はない。

「分かつたらおとなしくすつこんでな。バカどもが

わー、やめてー、お願ひだからそれ以上挑発しないでー

私が大魔法使いじゃなければミーナにすがり付いて止めたいたいところだつた。ミーナはそんな私の心をまったく察してくれない。

「ミニ力の連れだからおとなしく聞いてやつときやずいぶんな口の聞き方じやねえか。

あ？ いつたい何様のつもりだ、きさま

あゝ遅かつた。静まれドヘルガン。

「バウンティハントのドヘルガン＆ベクティムつていやあこの辺りやあ知らねーものはいねんだがな。一度お灸を据えてやんなきやなんねえか？」

お願ひミーナ、引いて

「間抜けな自己紹介してんじやないよ。あたしは知らないね。狩りがしたけりやその辺の野豚でも狩つときな。それ以上汚い面こつちに向けたらぶつ殺すわよ」

ドヘルガンとベクティムはお互に田配せして頷くと、それぞれの得物をぬるりと取り出した。

人の身長ほどもある片手剣を両手に構えるドヘルガン。
全長12メートルに及ぶ鞭を自在に操るベクティム。

2人はミーナの両側に分かれ、それぞれの武器で床を小突きはじめた。

「今なら謝れば許してやるぜ、お嬢ちゃん

「ふん、許す氣も無いのに良く言つよ」

ミーナは、そう言つとレンクのマジカルステッキを中段に構えた。

「いよつ、マジ狩る少女！ がんばれ～

誰かが離し立てる。なんて場違いなボケだ。

「おい、ここは酒場だぞ。やるなら表でやれ」「いいぞいいぞ、さつさとやれ」「手加減するなよドヘルガン」ガウが止めようとするが野次に飲み込まれる。

「じゃああんたが代わりにやってやれよ、ガウ」

野次馬の誰かがガウを名指した。

「ぐ……、それは、情報屋なんで、その……」

ガウが口籠まる。

ガウが喋っている最中にベクティムの前腕だけが残像に消える。同時に、耳を突き刺すよつた風切り音と、近くにいる者全員の体を浮かび上がらせる程の圧倒的空压。

ベクティムの、体はもちろん上腕から上は殆ど動いてさえいない。そのときミーナの右胸部直下から腰骨の上辺りまで、フリルに数十の鍔を同時に入れたかのような切れ込みが入った。鞭を逃れようとした後ろに飛び退きつつ捲れて露になるミーナのキメ細かい肌。上下とも辛うじて下着は切れずに繋がったまま。

飛び退くミーナは露になつた腹部を手の平で隠しつつ、お気に入りの魔女つ娘ドレスを台無しにされたことを悔しがる。

「まったくイライラするねえ」

ミーナは口の中で何かぼそりとつぶやくと同時にピンクのマジカルステッキを振り回した。すると猛り狂つていたベクティムの鞭は大蛇に変わつて鞭の持ち主に襲いかかつた。

「げえ、なんだこりゃあ」

ベクティムは愛用の得物に動きを封じられてなすすべなく床に転がつた。

「マジかよ……かわいい顔してえげつない魔法使いやがる」

「ふふ、あんた御自慢の片手剣は太刀魚にでも変えてあげましょうか？」

「馬鹿言え。そんな隙与えるかよ！」

ドヘルガンが両手に構える片手剣は、残像も残さぬばやさで大気を切り裂き、上下左右から同時にミーナに襲いかかつた。

野次馬たちはみんな切り刻まれたミーナを想像して息を呑む。すさまじい剣戟で起こる耳を塞ぎたくなる轟音と巻き上がる破片煙。

しかしドヘルガンの斬撃がおさまると、そこにはミーナはおらず、切り刻まれたカウンターとささくれた床があるだけだつた。

「まったく、修理も魔法でやるんだろうな」

ガウはミーナよりも酒場の内装の心配をしている。

「ガウ、ミーナは？」

胸が高鳴る。私は心配して聞いた。

「その辺にいるよ。どうやつたつて負けるわけないんだから……」
ピンクフリルの魔法少女は、息切れのまだ治まらないドヘルガンの両肩に、頭上からちょこんと舞い降りた。右手にマジカルステッキ、左手は露な腹部と千切れそうな下着を押さえている。

「て、てんめえ、いつたいどこから……？」

ドヘルガンの声と目に明らかな困惑の色。それに対しミーナはテレビのクッキングアイドルのよつな可愛さで、裏腹な毒舌を吐ぐ。

「おばかさん。自分が負ける理由も分からないんでしょ？ よく見てないみたいだからじつくり見せてやるよ。瞼の奥に焼き付けときな！」

そう言つて、ミーナはドヘルガンの頭上越しに、持つていいマジカルステッキの持ち手を奴の目前に突き出した。

『RULER ONLY』（管理部専用魔法具）

ステッキの柄には、はつきりとそう書かれてあつた。

「な、なんだそれ？ ズルイぞ……」

「バーカ。それがあんたの最後の台詞か？ ご希望なら墓碑に刻んじてやるよ」

ミーナがそう言つとステッキの先端が回転し七色に光り、ドヘルガンは消えうせた。

そして床には、粘膜が乾いて弱つた雨蛙が一匹、力の無いジャンプを繰り返していた。

「このまま踏んづけてもいいんだけど、最後の慈悲で生かしておいてやるよ。

今日は満員だから踏み潰されずに外に出られることを祈つときなミーナがそう言つた直後、遅れて到着した集団が世間話をしながら酒場に入ってきた。

彼らは足元を見ることも無くカウンターに近づき、逃げる暇が無

かつたドヘルガン蛙は変身後一分でスルメのようになつて死んだ。

「はい、もしもし、カウンターと床が少々壊れまして……」

ガウは管理部に修理のための連絡をとつている。

ミーナは魔法で引き裂かれた衣装を直している。

集まつた野次馬はとつくに散つていて、だれもドヘルガンの死を

悼む者はいなかつた。

やれやれ。

超高額タスクはもう始まつてしまつた。

これからはドヘルガンのような奴が無尽蔵に集まつてくる。

一方で、トニーが今度リーマスに進入するのはいつ頃だろ？

いくら優れたハッカーでも、この状況で自由に行動するのは不可

能な気がする。

いつたい私は何をすればいいんだ？

そのとき、表で誰かが奇声を発した。

「いたぞ、トニーだ！ 一億のクビだあ

その声を聞いて、その場にいる全員が出口に詰め掛けた。

戦闘よりも混雑で死人が出るんじやないかと思われる混みっぷりだ。

私は自分の耳を疑いながらその雑踏に加わつた。

人が多すぎて息ができない。

一刻も早くトニーの姿を確認したかった。

雪崩が起きるよつに出口から溢れ出す人波。

街の明かりに照らされた通りの真中にトニーはいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2035z/>

まじっく

2011年12月20日18時46分発行